

論文

東北地方の馬匹生産・利用史に関する基礎的研究

櫻庭陸央[※]

※ 帝京大学文化財研究所

要旨

本稿では、東北地方の古墳時代から近代に属するウマ・ウシ関連資料（ウマ遺体・ウシ遺体・馬具）の集成データに基づいて多様な属性分析を実施し、当該地域における馬匹生産と馬の利用の変遷について検討した。

ウマ・ウシ遺体の比率を比較した結果、全体的にウシよりもウマの比率が高かった。ウマの体高推定では地域差がみられた。生前の馬利用に関しては多様な用途が想定され、威信材や献上物、農耕馬や乗用馬などの利用が推定された。死後の馬利用に関して、死馬利用がおこなわれる場合と埋葬される場合が確認された。埋葬事例は時代を経るごとに次第に増加し、特に近世・近代では比較的多く確認された。

キーワード：古墳時代～近代、東北地方、ウマ遺体、ウシ遺体、馬具

はじめに

本稿では、東北地方の遺跡出土ウマ¹⁾遺体を中心に、馬具・ウシ遺体をも含めた集成データの検討を主軸として、時期差や地域差、または広域的な共通性を明らかにする。そして、その背景について考察をおこない、当該地域における馬匹生産・利用史に関する基礎的検討を試みる。

東北地方は日本列島のなかでも一大馬匹生産地であったとされる。しかし、馬匹生産・利用の直接的な証拠となるウマ遺体に関する従来の検討は、主に関東、中部、近畿地方を対象におこなわれてきた。東北地方を対象としたこれまでの研究では、文献史学による検討や、馬具に関する考古学的検討が主であり、ウマ遺体に着目した動物考古学的研究はほとんどおこなわれてこなかった。

このような研究の状況をふまえ、本稿では東北地方の馬匹生産・利用史に関する基礎的研究として、当該地域における古墳時代～近代のウマ遺体・馬具・ウシ遺体の集成をおこなう。ウシ遺体はウマ遺体との比率を算出する目的で集成し、馬具はウマの生前利用を推定する目的で集成する。ウマ遺体・馬具・ウシ遺体をウマ・ウシ関連資料とし、その集成データをもとに、ウマ・ウシ比率、ウマの体高推定、ウマの年齢推定、馬具組成、ウマの出土状況のそれぞれの傾向を明らかにする。その結果に関して、考古学や文献史学による先行研究を参照しつつ、当該地

域における馬匹生産およびその利用の変遷について考察する。

本稿の目的は、従来の検討が比較的低調であった東北地方の馬匹生産・利用史に焦点をあてて基礎的検討を実施し、列島における家畜文化史が有する新たな一側面を明らかにすることにある。

I. 東北地方の馬匹生産・利用に関する先行研究

I-1. 馬具の考古学的検討

東北地方では馬具に関する検討の蓄積があり、古墳時代に関しては堀哲郎による東北地方馬具の集成（堀2017）をはじめ、集成をふまえた各地域の特徴をとらえる試みが蓄積されつつある（河合2018、宮代2023・2025、横須賀2006a）。

古代では末期古墳より出土する馬具が注目されてきた（松本2006、堀2016・2022）。これらは轡に対する検討が主体であるが、ほかにも壺鐙を対象とした検討もみられる（高橋1996、八木1996）。これらの検討により、当該地域は古墳文化圏との交流のなかでその影響を受けつつも、文化の受容は選択的なものであり、独自の騎馬文化を築いていったことが明らかにされている。ほかにも、東北地方太平洋側を中心に各区域の出土例集成（高橋2019・2021、福田2008、村田2021）や、集成をふまえた変遷に関する検討例もおこなわれてきた。特に出土馬具のうち

主体となる轡に関して、その形態変遷は馬の制御改良に伴って生じていた可能性が指摘されている（津野2012）。

I-2. 文献史学の検討

文献史学の検討によって、東北地方太平洋側には古代以降、生産された馬が都へと献上されていた制度が存在していたことが明らかにされている。古代では平安時代より「陸奥国交易馬」における馬の献上があり、これを継承して奥州藤原氏が当該地域で生産された馬を献上していた（高橋1958・1960、大石1978・2001）。

中世では、糠部（北東北太平洋側）において馬を税として扱われ、献上する特殊な制度があったとされる（入間田1986・2008）。入間田宣夫は糠部以南にも着目し、岩手地域の久慈・閉伊における田鎖牧（入間田1988）、さらにその南についても、現在の宮城県域にあたる気仙郡・本吉郡が馬産地であり、これらの馬が中世において幕府へと献上されていた点を明らかにしている（入間田1990）。

近世に関しては盛岡藩を中心に、兼平賢治によって研究が進められてきた。兼平は、馬産地としての伝統を継承しつつ設置された南部九牧において生産された当時の南部馬が、幕府から高い評価を得ていたことを明らかにしている。加えて、当時は基本的に牛皮や鹿皮を利用してはなかなかに全国的な革細工の製造と需要の増加があり、ロシア接近に伴う対外的危機によって馬皮需要が高まったことを指摘した（兼平2013・2018）。

近代については、堀内孝による検討がある（堀内2019）。堀内は、日清戦争をきっかけに軍馬改良が実施されたが、それに伴って南部地方に種馬牧場が設置されたことで放牧地が手狭になり、民間の牧場が閉鎖に追い込まれた点、軍馬としての飼育に多額の費用が掛かったことで経済的格差が生じていた点を明らかにした。そして、これらの点から、日本最大の馬産地が近代以降では東北地方から北海道へ変化したと指摘した。

このように検討の蓄積がみられる太平洋側に対して、日本海側では相澤秀太郎による『扶桑略記』養老二年八月乙亥条の検討が注目される。これは渡島蝦夷と出羽蝦夷が馬千疋を貢納したという記事であるが、相澤はこれまで解釈が曖昧であったこの記事について、出羽蝦夷が馬十匹を京へ朝貢した記事で

ある可能性を指摘した（相澤2021）。

I-3. ウマ遺体の動物考古学的検討

馬具の考古学的検討および文献史学の検討のほか、近年では植月学によって、遺跡出土ウマの多角的な動物考古学的検討が展開されている。中心的な対象地域は北東北太平洋側であり、青森県域では平安時代の八戸市林ノ前遺跡（植月・他2020）、中世では室町時代の八戸市根城跡（植月・他2021）、岩手県域では平安時代の平泉町志羅山遺跡から出土したウマ遺体に関する検討が実施された（植月2024）。

これに対して、日本海側の検討事例は少ないものの、室町時代に属する、青森県平川市大光寺新城跡（植月2022）の検討がおこなわれている。

筆者自身も、これまで、青森県域の古代・中世に属するウマ遺体を対象として、多角的な動物考古学的検討を試みた（櫻庭2023）。また、九州地方の考古遺跡から出土したウマ遺体、ウシ遺体の検討を実施し、東北地方との一部比較をおこなっている（櫻庭2024）。

I-4. 先行研究の整理からみた課題

先行研究をみると、馬具の考古学的検討は太平洋側を中心に古墳時代～古代に集中しているといえる。文献史学においては古代～近世を中心に研究の蓄積がみられる。このような状況のなか、近年では北東北太平洋側を中心に、古代・中世ウマ遺体の動物考古学的検討が実施され、文献史料との比較検討が可能になりつつある。これらの先行研究の整理から、今後は、馬具を中心とした既往の考古学的研究や文献史学の成果と比較しながら、東北地方において、その検討対象を広げていく必要がある。空間的には青森県域以南、時間的には近世以降の比較的新しい時代を対象とした馬具やウマ遺体の検討が必要であるといえる。

また、従来の研究が全体的に太平洋側を中心としていた点をふまれば、日本海側における検討も必要であると考えられる。先述のように、文献史学による研究成果が一部みられるものの、遺跡出土ウマの検討事例はあまりみられない。まずはどのような傾向が看取されるか、ウマ遺体に関する基礎的情報の整備が急務である。

なお、ウマと同様に大型家畜であるウシへの着目はほとんどなされてこなかった。ウマ・ウシ遺体の

比率比較という観点を想定すれば、大型家畜における比重から、当該地域の家畜生産・利用に関する新たな特徴が見出されると考えられる。したがって、当該地域におけるウシ遺体出土例の把握も重要といえる。

馬具に関しても、先行研究では古墳時代および古代の資料に関する検討が主であり、中世以降の様相に関しては未だ不明である部分が多い。したがって、中世以降の馬具についても目を向けていく必要があると考えられる。

本稿では、先行研究の整理をふまえて導き出された上記課題の解明を試みる。列島における馬匹生産・利用に関する従来の検討は、主に関東・中部・近畿地方が対象であった。馬具やウマ遺体、文献史学などの各分野で検討成果がみられる(右島編2019、佐々木・他編2021など)。本稿での検討を通して東北地方の馬匹生産・利用史を明らかにすることで、今後以南地域との新たな視点での比較が可能となり、列島の家畜生産・利用史に関する新たな様相の解明が期待できる。本研究の大きな意義が、ここにある。

II. 分析方法

II-1. ウマ・ウシ遺体・馬具の集成

本稿では、東北地方の古墳時代～近代に属するウマ遺体・馬具・ウシ遺体(ウマ・ウシ関連資料)の集成をおこなった。集成にあたっては東北地方における各遺跡の報告書を参照しつつ、先行研究における文献²⁾についても参照した。集成した資料の情報に関しては各遺跡の報告書、または上記文献の内容にしたがった。

対象とする時空間に関して、時期については若干の細分をおこなった。時期区分における各時代と年代の対応関係について、古墳時代は5世紀～7世紀初頭³⁾、古代は7世紀～12世紀、中世は13～16世紀、近世は17～19世紀前半、近代は19世紀後半以降として扱った。本文での時代区分の表記と、時代・年代の対応関係に関して、表1に示した。

地域的な対象に関しては、大きく太平洋側と日本海側に二分した。まず、太平洋側に関して、青森県では八戸市・おいらせ町・七戸町・東北町・東通村、他県域については岩手県、宮城県、福島県とした。日本海側に関して、青森県では平川市・田舎館村・弘前市・青森市・つがる市・五所川原市・蓬田村、

表1 本稿の時期区分

時代		年代
大区分	本文での表記(細分)	
古墳時代	古墳時代中期	5世紀
	古墳時代後期	6世紀
古代	飛鳥時代	7世紀
	奈良時代	8世紀
	平安時代前期	9世紀
	平安時代中期	10世紀
	平安時代後期	11世紀
	平安時代末期	12世紀
中世	中世前期	13～14世紀前半
	中世後期	14世紀後半～16世紀
近世	近世前期	17世紀～18世紀前半
	近世後期	18世紀後半～19世紀前半
近代	近代	19世紀後半～

他県域については秋田県・山形県とした⁴⁾。

II-2. ウマ・ウシ遺体出土比率

集成の結果をもとに、ウマ・ウシ遺体の出土遺跡数を各県域・時期ごとに比較した。帰属時期が複数にまたがっている場合にはその時期の数で除し、それぞれの時代を含めて計上した。

さらに、ウマ・ウシ遺体の合計が40点以上みられた遺跡を対象に、両種の比率を算出し、比較した(同定標本数=NISP)。これらは表2に記載した各遺跡の参考文献の内容にしたがいつつ、集計した。なお、埋葬事例については後述のように別途検討し、本分析においては除外した。

II-3. 体高推定

ウマ遺体の体高に関して、林田・山内(1957)の推定式を用いて、四肢骨全長より推定した。本分析については、8点以上の四肢骨全長計測値が得られている遺跡を対象とした⁵⁾。個体識別に留意し、同一個体と判明している場合には推定値の平均値を用いた。不明である場合には、それぞれを集計した。

II-4. 年齢推定

ウマ遺体の年齢に関しては、Hoppe et al. (2004)を参照した。顎歯の萌出状況からdp4とP4の交換に着目し、前者が萌出している場合は3.5歳以下、後者が萌出している場合には3.5歳以上とし、両者の個体比率を比較した。あらゆる年齢推定の方法のうち、顎歯の萌出状況から推定する方法をとったのは、

報告書集成データを取り扱う上でもっとも多くのデータを議論の俎上に載せることができるためである⁶⁾。また、集成をおこなうなかで、歯種のなかでもdp4またはP4が多く確認される傾向にあったため、歯種についてはdp4とP4を対象とした。なお、これらについては、検討可能事例が5点以上の遺跡を対象とした。個体識別に留意し、同一個体と判明し、上顎・下顎が備わっている場合には一方を対象とした。不明である場合には上顎と下顎を区別せず、集計した。

II-5. 埋葬事例

ウマ遺体の埋葬例について時期別で計上した。埋葬の認定は比較的困難であるが、本稿では各報告書において埋葬と推定されている資料のほか、解剖学的位置を保ち、埋葬として推定できる出土状況の事例についても埋葬として扱った。これらの計上は個体ごとにおこなった。帰属時期が複数にまたがっている場合にはその時期の数で除し、それぞれの時代に含めて計上した。なお、轡などの馬具が土坑から出土した際に埋葬と推定されている事例もみられたが、本稿では馬具のみの出土事例に関しては検討から除外した。

また、埋葬事例の実数のみでは本来の傾向を示しているか不安が残るため、埋葬事例が確認された遺跡数をウマ遺体が確認された遺跡数全体で除して比率を求め、時期別での比較検討をおこなった。

II-6. 馬具組成

馬具については、その種類別組成を算出した。種類に関して、轡、鐙、鞍、頭絡、蹄鉄のほか、杏葉や雲珠などは装飾具として一括し、計上した。

III. 分析結果

III-1. 集成

図1には、ウマ遺体、ウシ遺体、馬具を集成した結果をもとに、時代ごとの遺跡分布を示した。表2には、集成した各事例の概要を示した。なお、図1に関して近世と近代については一括して示したが、これは出土例において帰属時期が「近世～近代」とされる事例が多くみられたことによる。

集成の結果、青森県域では45遺跡、岩手県域では60遺跡、秋田県域では11遺跡、宮城県域では49遺跡、

山形県域では12遺跡、福島県域では67遺跡が確認された。

III-2. ウマ・ウシ遺体出土比率

図2には、ウマ・ウシ遺体出土遺跡数の比較結果を示した。東北地方におけるウマ遺体の出土例は、岩手県中半入遺跡（古墳時代中期）、ウシ遺体の出土例は宮城県山王遺跡・市川橋遺跡（古墳時代後期）以降よりみられる。時期ごとの傾向をみていくと、古墳時代に関しては、基本的に両種の出土遺跡数が少なかった。これに対して、古代以降では出土例が増加していく傾向がみられた。合計が5遺跡以上の事例を対象に概観すると、基本的にウマ遺体が卓越するという共通性が看取された。しかし、岩手県域近代ではウマ・ウシ遺体出土遺跡数が同率であり、特異的な傾向を示した。

図3には合計40点以上みられた遺跡を対象に、出土比率を算出した結果を示した（NISP）。検討の対象となったのは主に太平洋側の遺跡であり、日本海側での事例は比較的少なかった。近世までの検討ではあるものの、分析対象となった各遺跡では基本的にウマ遺体が主体という点で共通していた。

III-3. ウマ遺体推定体高比較

図4には、ウマ遺体の四肢骨全長計測値をもとに体高を推定し、遺跡比較をおこなった結果について示した。全体を概観すると、おおむね約110～140cmの間におさまった。中央値に着目すると、青森県林ノ前遺跡では約133cm、他遺跡ではおおむね約125～127cmであり、林ノ前遺跡において体高が比較的高い傾向にあった。日本海側のデータは大光寺新城跡に限られるが、他の太平洋側の遺跡に比べて小型個体が多く含まれていた。

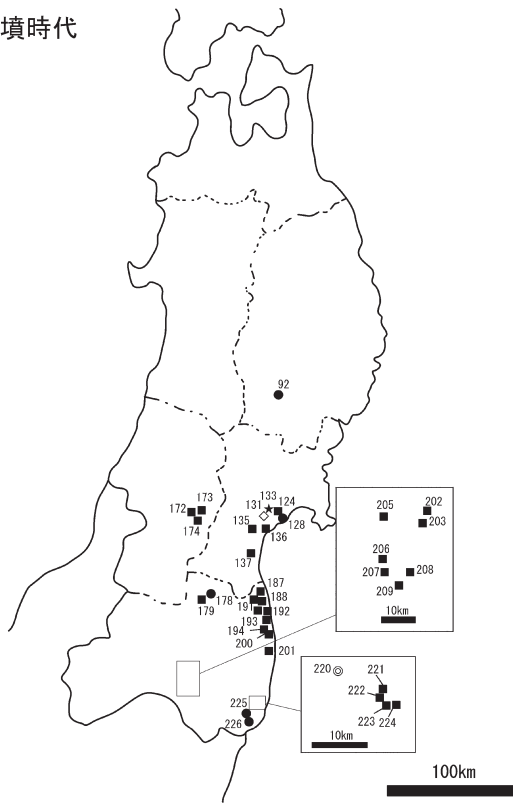
III-4. ウマ遺体推定年齢比率

図5には、3.5歳以上・以下の比率の比較結果について示した。上記のウマ・ウシ遺体比率および推定体高で検討対象とした遺跡以外に、ここでは新たに青森県境関館遺跡についても検討した。検討の結果、林ノ前遺跡および根城跡では3.5歳以下の比率が高く、他遺跡では3.5歳以上が主体であった。

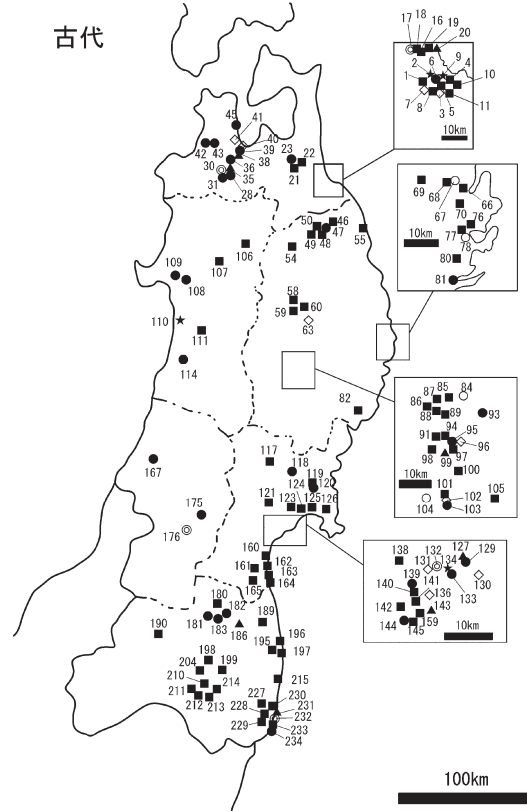
III-5. 埋葬事例時代別比較

埋葬と判断された出土例について表3に示した。

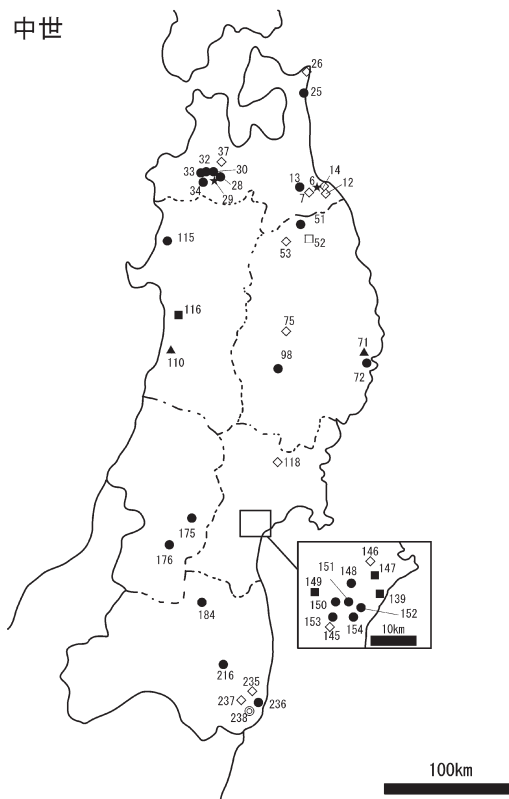
古墳時代



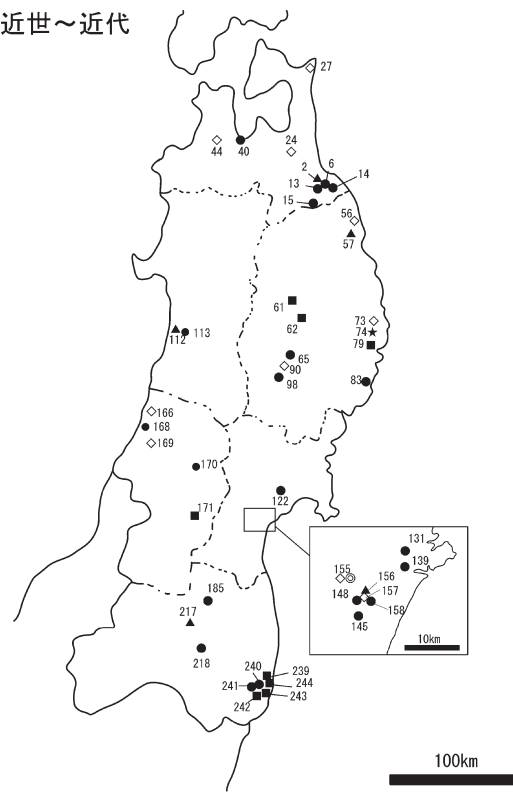
古代



中世



近世～近代



●: ウマ ▲: ウシ ■: 馬具 ◎ウマ+馬具 ◇: ウマ+ウシ ○: ウシ+馬具 ★: ウマ+ウシ+馬具

図1 東北地方におけるウマ・ウシ関連資料出土遺跡の分布

表2-1 東北地方におけるウマ・ウシ関連資料①

No.	市町村	遺跡名	古墳時代			古代			中世			近世			近代			参考文献
			ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	
1	八戸市	岩ノ沢平遺跡															青森県教育委員会(2000)	
2	八戸市	林ノ前遺跡				●	●	●					●				青森県教育委員会(2005e・2006b)・八戸市教育委員会(2007・2008・2009・2010・2011)・榎月・他(2020)	
3	八戸市	丹後平古墳				●	●										八戸市教育委員会(1991・2002a)	
4	八戸市	鹿嶋河古墳						●									青森県(2005)	
5	八戸市	酒美平古墳						●									八戸市教育委員会(2001)	
6	八戸市	根城跡				●			●	●	●	●					八戸市教育委員会(1980・1982・1985・1986・1987・1988a・1989a・1992・1993a・1996・1997・1998・2010・2015)・小林(1987)・榎月・他(2021)	
7	八戸市	八幡遺跡				●	●		●	●							八戸市教育委員会(1988b・2017)	
8	八戸市	殿見遺跡						●									八戸市教育委員会(1993a)	
9	八戸市	熊野堂遺跡				●	●										八戸市教育委員会(1989b・2016)	
10	八戸市	田向遺跡						●									八戸市教育委員会(2004b)	
11	八戸市	瀬野遺跡						●									青森県教育委員会(2006a)	
12	八戸市	市子林遺跡						●	●								八戸市教育委員会(2004a)	
13	八戸市	千石原古墳遺跡						●				●					青森県教育委員会(2012)・八戸市教育委員会(2010・2014)	
14	八戸市	新井田古墳遺跡						●	●			●					八戸市教育委員会(2002b)	
15	八戸市	中野遺跡						●									青森県教育庁文化財保護課(2004)	
16	おいらせ町	阿光坊古墳						●									下田町教育委員会(1989・1990・1991)・おいらせ町教育委員会(2007a・b)	
17	おいらせ町	ふくへ(3)遺跡				●		●									青森県教育委員会(2005c)	
18	おいらせ町	天神山遺跡						●									おいらせ町教育委員会(2007a)	
19	おいらせ町	中野平遺跡						●									下田町教育委員会(1997)	
20	おいらせ町	根岸(2)遺跡					●										白石町教育委員会(1995)	
21	七戸町	貝ノ口遺跡						●									七戸町教育委員会(1996)	
22	七戸町	倉越(2)遺跡						●									青森県教育委員会(2005a)	
23	七戸町	治部袋遺跡				●											七戸町教育委員会(1995)	
24	東北町	赤平(2)遺跡										●	●				青森県埋蔵文化財センター(2007)	
25	東通村	浜通遺跡						●									青森県教育委員会(1984)	
26	東通村	浜尻屋貝塚						●	●								東通村(1999)	
27	東通村	大平貝塚						●	●			●	●				東通村(1999)	
28	平川市	李平下安原遺跡				●		●									青森県教育委員会(1988)	
29	平川市	大光寺新城跡				●		●	●	●							青森県教育委員会(1990・2000a・b)・榎月(2022)	
30	田舎館村	前川遺跡				●		●									青森県教育委員会(2009)	
31	弘前市	早稲田遺跡				●		●									弘前市教育委員会(2001)	
32	弘前市	塔原館遺跡						●									青森県教育委員会(1987)	
33	弘前市	独狐遺跡						●									青森県教育委員会(1986)	
34	弘前市	堀越遺跡						●									弘前市教育委員会(2014)	
35	青森市	大沼遺跡					●										浪岡町教育委員会(1990)	
36	青森市	山元(1)遺跡				●											青森県教育委員会(2005d)	
37	青森市	浪岡城跡						●	●								浪岡町教育委員会(1980・1982・1983・1984・1986)	
38	青森市	三内沢部(3)遺跡					●										青森県教育委員会(2005b)	
39	青森市	三内遺跡				●											青森県教育委員会(1978)	
40	青森市	新田(1)遺跡				●						●					青森市教育委員会(2010・2011・2014)	
41	青森市	新田(2)遺跡				●											青森市教育委員会(2011)	
42	つがる市	石上神社遺跡				●											青森県教育委員会(1977)	
43	五所川原市	十三遺跡				●											青森県教育委員会(2013)	
44	五所川原市	原野(8)遺跡				●						●	●				青森県教育委員会(2002)	
45	蓬田村	蓬田大塚遺跡				●											榎井・菊池(1987)	
46	二戸市	上田遺跡						●									若手県教育委員会(1981)	
47	二戸市	中野堀川遺跡				●											若手県埋蔵文化財センター(1985)	
48	二戸市	瀬野前遺跡						●									二戸市埋蔵文化財センター(2008)	
49	二戸市	飛鳥谷地1遺跡						●									若手県教育委員会(1988)	
50	二戸市	コア大石						●									若手県教育委員会(2021)	
51	二戸市	瀬川遺跡						●									若手県教育委員会(2006a)	
52	二戸市	佐野小路遺跡						●	●								二戸市埋蔵文化財センター(2015)	
53	一戸町	一戸城跡						●									一戸町文化財愛護協会(1982)	
54	八幡平市	上の山VI遺跡						●									若手県教育委員会(1983)	
55	久慈市	轟館跡						●									若手県教育委員会(1992c)	
56	久慈市	大井1遺跡						●			●	●					若手県教育委員会(1999)	
57	久慈市	山根館跡						●						●			若手県教育委員会(2002b)	
58	盛岡市	太田ノ八遺跡(坂波城跡)						●									若手県教育委員会(1982)	
59	盛岡市	竹花前遺跡						●									若手県教育委員会(1979a)	
60	盛岡市	細谷地遺跡						●									若手県教育委員会(2004)	
61	盛岡市	台太郎遺跡						●									若手県教育委員会(2001b)	
62	盛岡市	稲遺跡						●									若手県教育委員会(1979b)	
63	矢巾町	藤沢秋森遺跡				●	●										八木(1996)	
64	矢巾町	徳戸城跡						●									若手県教育委員会(1992b)	
65	花巻市	高木中館遺跡						●									若手県教育委員会(2006b)	
66	宮古市	藤星VI遺跡						●									若手県教育委員会(2010)	
67	宮古市	田原軍堂前遺跡						●									若手県教育委員会(2015・2020c)	
68	宮古市	田原館跡						●									若手県教育委員会(2020)	
69	宮古市	鯉沢遺跡						●									宮古市教育委員会(1992)	
70	宮古市	荷竹日向1遺跡						●									若手県教育委員会(2018c)	
71	宮古市	山口町1遺跡						●									若手県教育委員会(2019)	
72	宮古市	田原軍堂前遺跡						●									若手県教育委員会(2020a)	
73	宮古市	青嶽1遺跡						●						●			若手県教育委員会(2020b)	
74	宮古市	根井沢六田IV遺跡						●					●	●			若手県教育委員会(2018b)	
75	紫波町	柳田館遺跡						●									若手県教育委員会(1980)	
76	山田町	間木戸1遺跡						●									若手県教育委員会(2015・2016)	
77	山田町	沢田II遺跡						●									若手県教育委員会(1997)	
78	山田町	原の沢IV遺跡				●											若手県教育委員会(1998)	
79	山田町	浜川目沢II遺跡						●									若手県教育委員会(2018a)	
80	大畑町	夏本遺跡						●									若手県教育委員会(1999)	
81	釜石市	川原遺跡				●											釜石市教育委員会(2007)	
82	陸前高田市	友沼遺跡						●									陸前高田市教育委員会(1990)	
83	大船渡市	長谷堂貝塚						●									若手県教育委員会(2020a)	
84	北上市	千刃遺跡				●		●									若手県教育委員会(2016)	
85	北上市	塚向II遺跡						●									若手県教育委員会(2005)	
86	北上市	本宮羽場遺跡						●									北上市埋蔵文化財センター(1995)	
87	北上市	五丸古墳群						●									若手県教育委員会(1963)	
88	北上市	上鬼柳田遺跡						●									若手県教育委員会(1992a)	
89	北上市	西野遺跡						●									若手県教育委員会(1979)	
90	北上市	唐戸崎遺跡						●		●							北上市埋蔵文化財センター(2018)	
91	金ヶ崎町	遺場古墳						●									金ヶ崎町教育委員会(1968)	
92	奥州市	中平入遺跡	●					●									若手県教育委員会(2002a)	
93	奥州市	落合II遺跡				●											若手県教育委員会(1980)	
94	奥州市	玉貫遺跡				●											若手県教育委員会(1981)	
95	奥州市																	

表2-3 東北地方におけるウマ・ウシ関連資料③

No.	市町村	遺跡名	古墳時代			古代			中世			近世			近代			参考文献
			ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	ウマ遺体	ウシ遺体	馬具	
205	磯石町	成田陣ヶ丘遺跡			●												磯石町(1982)	
206	白河市	白河観音山横穴古墳群			●												白河市教育委員会(1973)	
207	白河市	久保前古墳			●												白河市(2001)	
208	白河市	沢内古墳群			●												福島県文化センター(1979)	
209	白河市	長妻久保古墳			●												白河市(2001)	
210	白河市	久保横穴群						●									福島県(1964)	
211	白河市	新内横穴墓群															白河市教育委員会(1981)	
212	白河市	白河観音山横穴古墳群						●									白河市教育委員会(1973)	
213	白河市	沢内古墳群						●									福島県文化センター(1996)	
214	石川町	山神古墳						●									石川町(2006)	
215	鶴岡市	名古谷横穴墓群						●									鶴岡市教育委員会(1989)	
216	小野町	猪久保城跡							●								福島県教育委員会(1994)	
217	北塩川村	下高山遺跡												●			北塩原村教育委員会(2014)	
218	玉川村	宮ノ前遺跡										●					福島県教育委員会(2002)	
219	広野町	堂ノ原遺跡															広野町教育委員会(2002)	
220	いわき市	龍門寺遺跡	●		●												いわき市教育文化事業団(1986)	
221	いわき市	八幡横穴群			●												いわき市教育文化事業団(2011)	
222	いわき市	白穴横穴群			●												いわき市教育文化事業団(2010)	
223	いわき市	中田後藤横穴			●												福島県いわき市(1971)	
224	いわき市	藤島堂横穴群			●												いわき市教育文化事業団(2012・2020・2022)	
225	いわき市	千代駒横穴群			●												いわき市教育文化事業団(1993)	
226	いわき市	勿来金冠塚古墳			●												猪俣(2006)	
227	いわき市	横穴古墳群						●									福島県いわき市(1971)	
228	いわき市	甲塚古墳						●									福島県(1964)	
229	いわき市	清水横穴						●									いわき市教育文化事業団(1986)	
230	いわき市	柳塚古墳群						●									渡辺(1964)	
231	いわき市	根塚遺跡					●										いわき市教育文化事業団(2000)	
232	いわき市	荒田白鳥早遺跡					●										いわき市教育文化事業団(2001a)	
233	いわき市	崩山横穴群						●									いわき市教育文化事業団(2018)	
234	いわき市	崩山横穴群					●										いわき市教育文化事業団(2002b)	
235	いわき市	中山遺跡						●		●							いわき市教育文化事業団(1997b)	
236	いわき市	神谷作古墳群						●		●							いわき市教育文化事業団(2017)	
237	いわき市	久世屋敷・香匠地遺跡						●		●							いわき市教育文化事業団(1993)	
238	いわき市	塚遺跡						●		●							いわき市教育文化事業団(1990)	
239	いわき市	芦田島早遺跡								●				●			いわき市教育文化事業団(1991)	
240	いわき市	崩山遺跡										●					いわき市教育文化事業団(2001b)	
241	いわき市	寺台遺跡										●					いわき市教育文化事業団(1989)	
242	いわき市	泉町C遺跡														●	いわき市教育文化事業団(1997a)	
243	いわき市	後田遺跡														●	いわき市教育文化事業団(2017)	
244	いわき市	栗木作遺跡														●	いわき市教育文化事業団(2002c)	

分析の結果、太平洋側の事例が多く確認された。図6には、表3をもとに古墳時代から近代に至るまでの出土事例数の推移を示した。検討の結果、次第に埋葬事例が増加していく傾向がみられた。特に、近世は10例近く、近代は20例以上と比較的多かった。図7には、埋葬事例が確認された遺跡数を各時代に属する遺跡の数で除し、時期別の比率を示した。近世・近代の比率が高く、約30%であった。古墳時代がこれに次ぎ、約16%であった。中世は約12%、古代は約5%に留まった。埋葬事例の実数とは若干の差異があるが、遺跡数の比率推移で検討しても、近世・近代の埋葬事例の多さがうかがえる。

図8には近世、図9には近代のウマ遺体埋葬事例の代表例を示した。図8には岩手県館Ⅱ遺跡（16世紀以降）、岩手県高木中館遺跡（近世以降）を示した。館Ⅱ遺跡は隅丸形状の土坑から出土している。頭部を北側、背を西側に向け、脚部を東側に折りたたんだ状態で出土している（岩手県教育委員会2006a）。高木中館遺跡は隅丸形状の土坑から出土しており、ここで提示したSX04以外にも同様の形態を呈するSX03から下顎骨が出土しており、SX04と同様に埋葬とみられる。SX04についてみると、本遺構では頭部を西側、背を北側、脚部を南側に向けた状態で出土している（岩手県教育委員会2006b）。

図9には岩手県青猿Ⅰ遺跡（近代）、宮城県仙台城三ノ丸跡（明治後半以降）、岩手県根井沢穴田Ⅳ遺跡（大正～昭和初期かそれ以前）を取り上げた。青猿Ⅰ遺跡では獣骨を伴う土坑が7基検出された。複数の土坑が切りあっており、ウマ遺体のほかにウシ・カモシカ遺体が確認されている（岩手県教育委員会2020b）。仙台城三ノ丸跡では隅丸形状の土坑から出土しており、ウマ遺体の頭部は北側で確認され、南方向を向いている。四肢骨は土坑の南側で出土し、東西方向に折り曲げられた状態である（仙台市教育委員会1985）。根井沢穴田Ⅳ遺跡では土坑墓が20基検出されており、ウマ遺体のほか、ウシ・イヌ遺体も出土している。複数の土坑墓が重なり合った状態で確認された。本遺跡ではウマ遺体の付近から蹄鉄や頭絡などの馬具が出土しており、これらの馬具を装着したまま埋葬された可能性が指摘されている。土坑の平面プランは円形、楕円形、隅丸長方形のものがあり、ウマ遺体の頭部は東西南北の様々な方向に向いている（岩手県教育委員会2018b）。

Ⅲ-6. 馬具組成比較

表4には、馬具組成の比較結果について示した。出土量で見れば、太平洋側が日本海側に比して圧倒的に多い。また、時代で見ると、古墳時代および古代が数量的に卓越するが、この傾向は日本海側にお

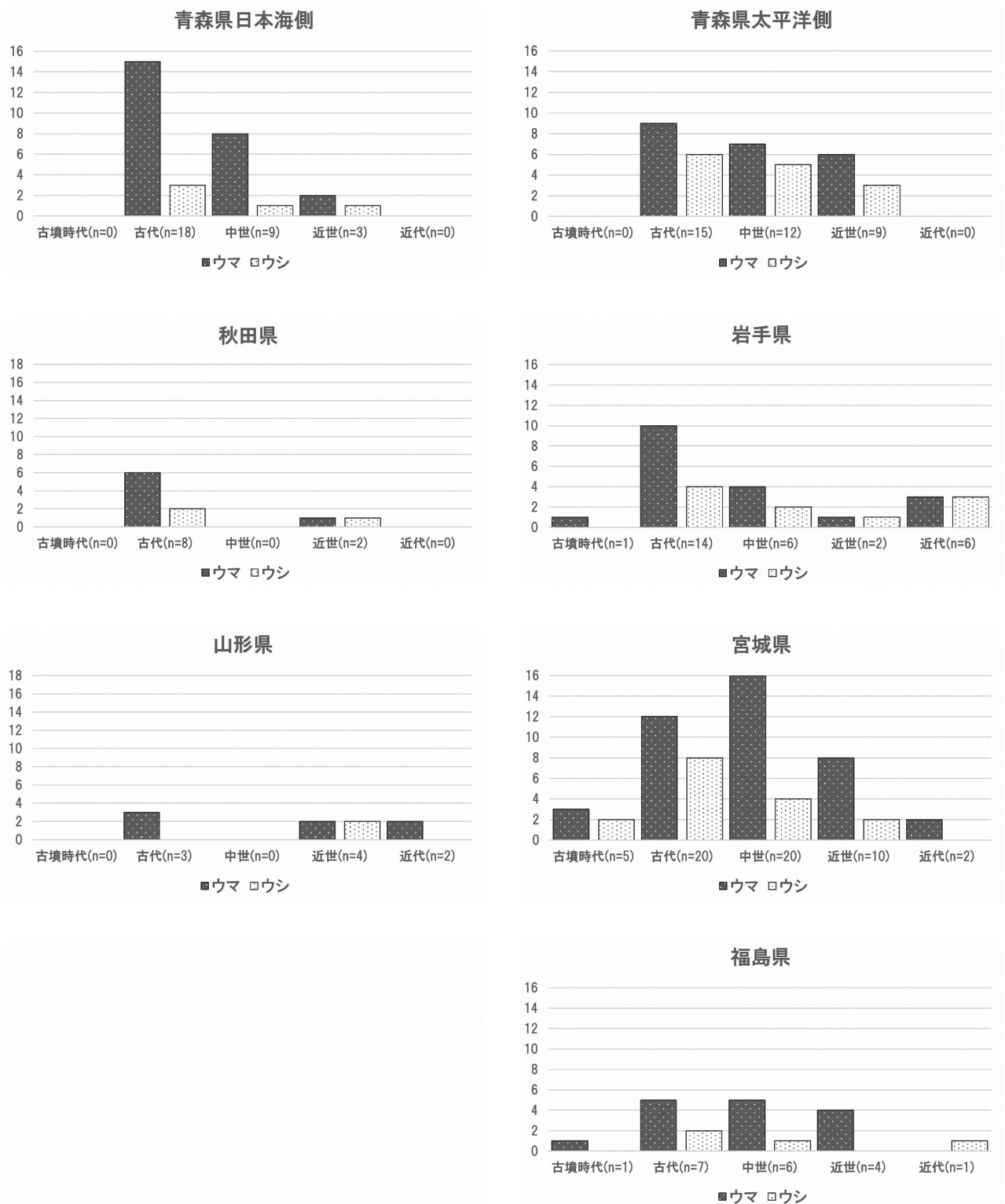


図2 ウマ・ウシ遺体出土遺跡数比較

いても類似する。他にも東西で共通する傾向が確認され、古墳時代では装飾具が主体となる点、騎乗に関する馬具では轡が主体となる点、近代以降では蹄鉄がみられるようになる点が看取された。

IV. 考察

IV-1. 家畜利用における牛馬の比率

IV-1-1. 家畜利用における馬卓越の背景

ウマ・ウシ遺体出土遺跡数の比率、そして同定標

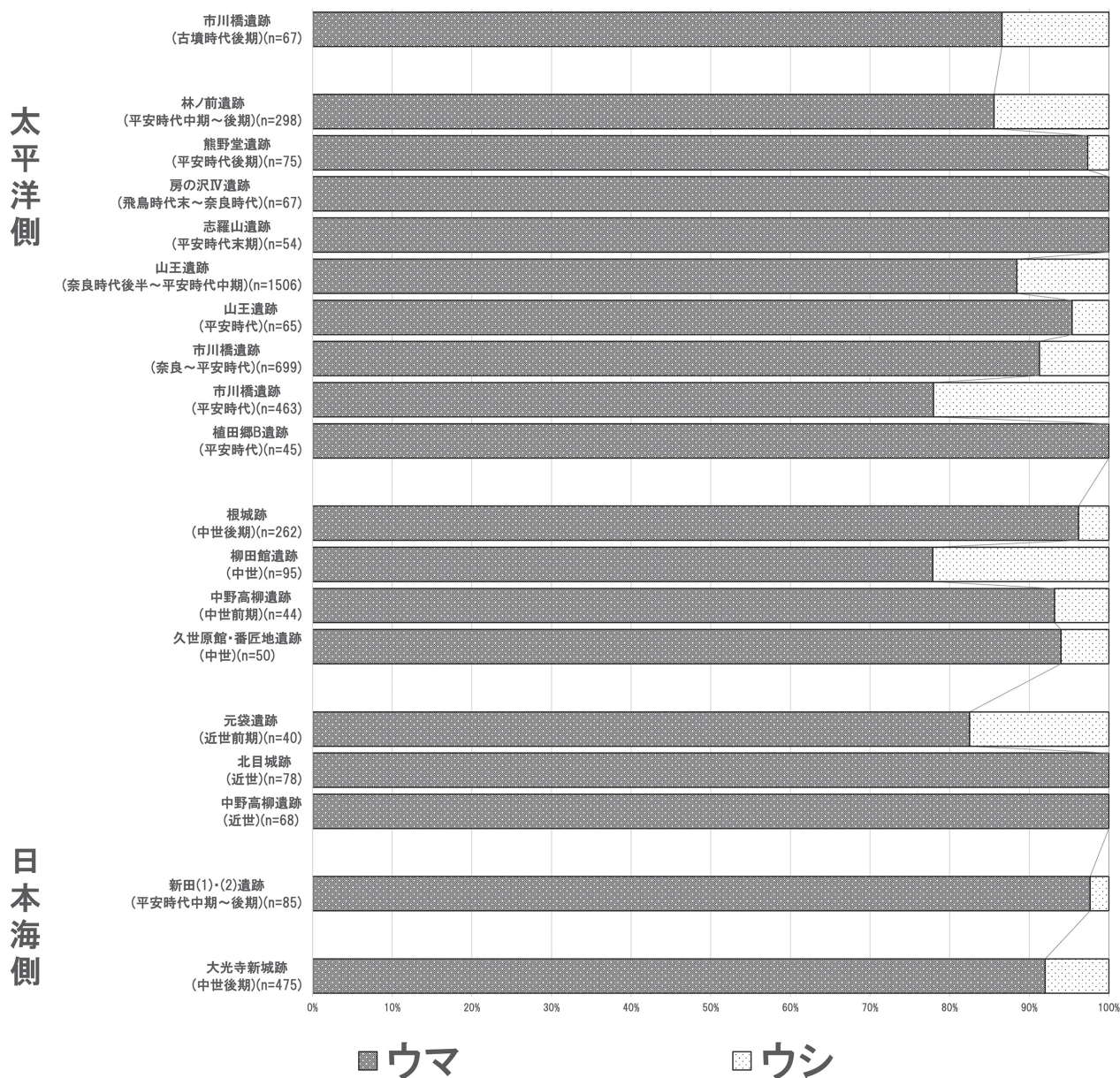


図3 東北地方におけるウマ・ウシ遺体比率の比較 (NISP)

本数によるウマ・ウシ遺体比率を比較した結果、ウマ遺体が主体となるという広域的な共通性がみられた。したがって、東北地方では、古墳時代中期において馬が、後期において牛が導入されて以降、両種の比重では馬の方が大きくあり続けたといえる。出土事例が比較的少ないが、日本海側でもウマ遺体が主体であった。この点は家畜利用における馬の比重が東北地方で広域的に高かったことを示す。東北地方以外の地域に目を向けると、古代東国では遺跡出土ウマ・ウシ遺体の比較を通して牛の比率が比較的高かったことが明らかにされており、その背景には

蘇や牛皮の貢納（佐伯1967）があったと考えられている（植月2018）。このような東国との違いをふまえれば、牛馬の導入以降、基本的に馬の比重が高く有り続けたのは東北地方の特徴といえる。筆者はかつて、ウマの厩肥の発酵温度がウシに比べて高く、寒冷地においてその効力が高いという点、加えて当該地域は田植えの時期が短いことから足の速い馬が役畜として利用されたという点（市川1981）が、その背景にあったと考えた（櫻庭2023）。一般的に農耕馬として使役する際には馬鍬が用いられていたとされるが（河野2008）、岩手県田鎖館跡（9世紀頃）

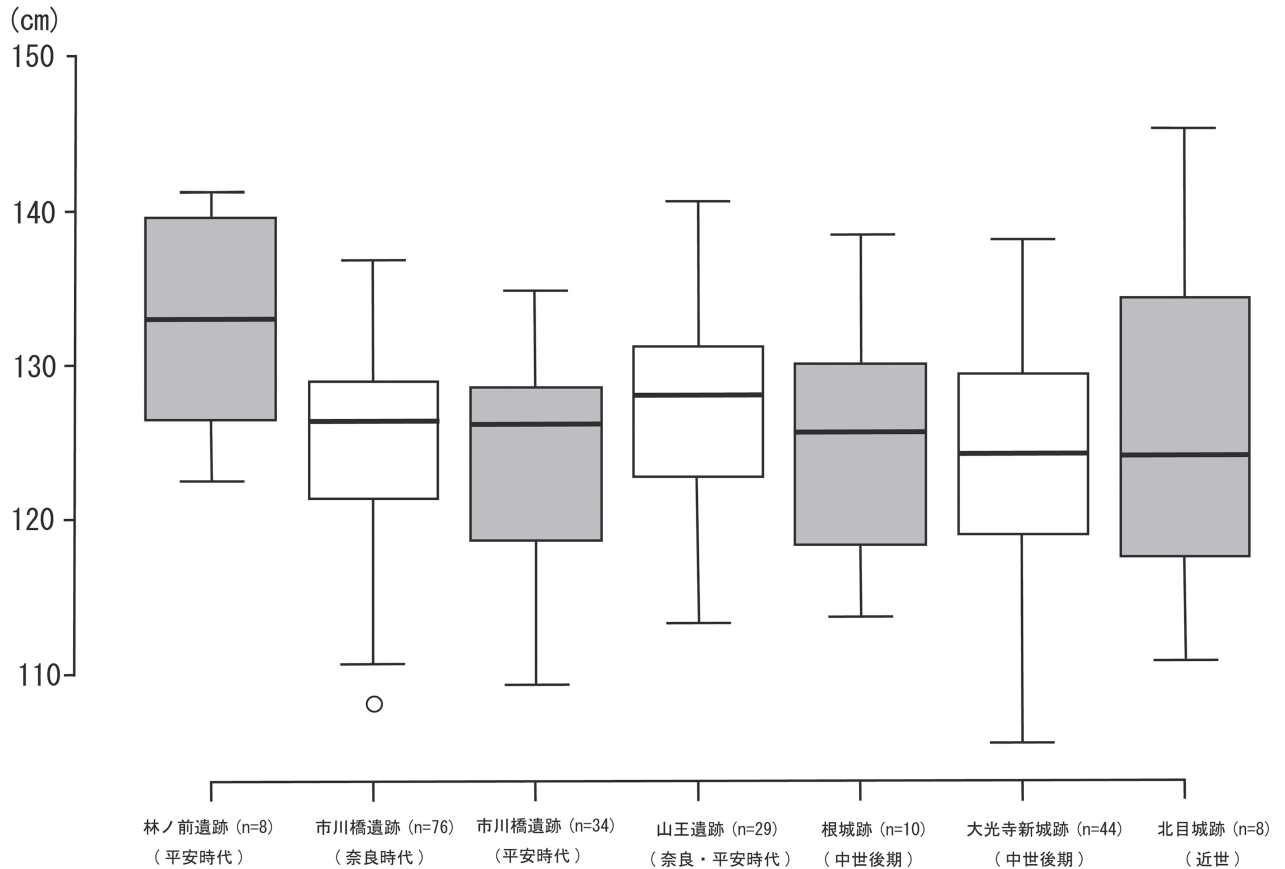


図4 東北地方におけるウマ遺体推定体高比較

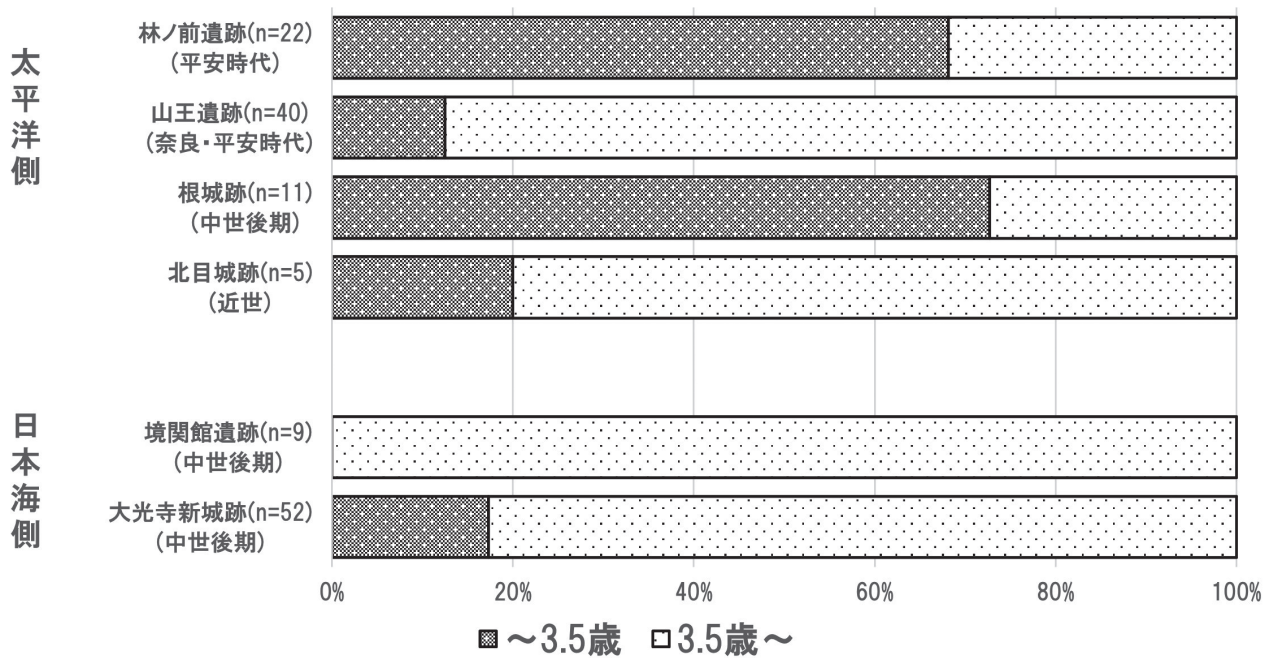


図5 東北地方におけるウマ遺体推定年齢比較

表3 東北地方におけるウマ遺体埋葬事例

	No.	遺跡名	埋葬例
太平洋側	178	月ノ輪山古墳(古墳時代後期)	1
	3	丹後平古墳(飛鳥時代後半～奈良時代前半)	1
	78	房の沢IV遺跡(7飛鳥時代末～奈良時代後半)	4
	132	多賀城跡(平安時代前期)	1
	154	戸ノ内遺跡(中世後期)	1
	75	柳田館遺跡(中世後期以前)	2
	51	館II遺跡(中世後期以降)	1
	240	横山B遺跡(中近世)	2
	24	赤平(2)遺跡(近世)	1
	15	中野館遺跡(近世)	2
	219	堂ノ原遺跡(近世前半)	1
	65	高木中館遺跡(近世以降)	2
	241	寺台遺跡(近世以降)	1
	185	宮脇遺跡(近世～近代)	2
	73	青猿I遺跡(近代)	4
74	根井沢穴田IV遺跡(大正～昭和初期かそれ以前)	12	
145	中田南遺跡(明治2年かそれ以前)	2	
155	仙台城三ノ丸跡(明治後半以降)	1	
日本海側	170	道出遺跡(近世～近代)	1
	168	木の下館跡(近現代)	1

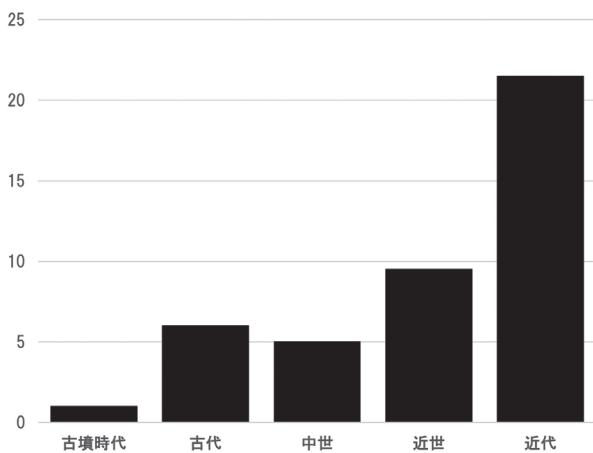


図6 東北地方における埋葬事例数の推移

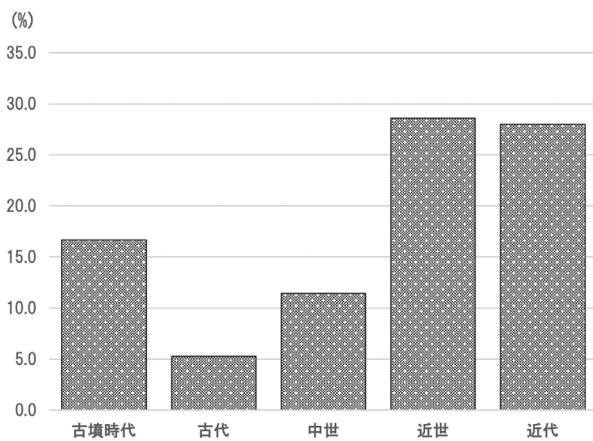


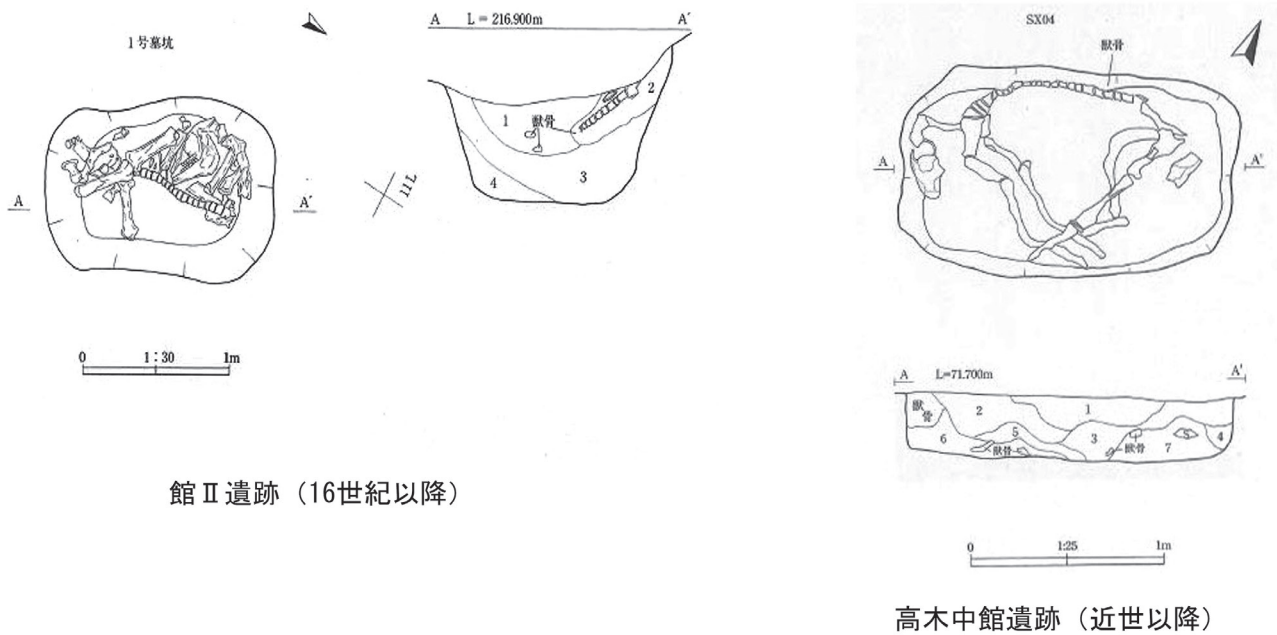
図7 馬埋葬事例がみられた遺跡の時代別比率

(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020)、丸子館跡(14～15世紀)(岩手県埋蔵文化財センター1985)では鉄製馬鍬が、宮城県市川橋遺跡(6世紀末～7世紀前半)(宮城県教育委員会2001)、福島県大森A遺跡(6世紀後半)(福島県教育委員会1990)では木製馬鍬がそれぞれ出土している。これらの出土例は太平洋側に限られるが、古墳時代後期から中世にかけて、農耕馬としての利用があった証拠といえる。また、中世以降の時代に属する馬鍬は未だ確認できていないが、特に近世では泰平の世が到来したことで軍用馬に比して農耕馬としての需要が高まり、馬が農作業において重要な役割を果たし、農民の生活に必要な存在として認識されていたことが指摘されている(浪川2018)。農耕馬以外には、乗用馬・軍用馬としての利用価値も高かったといえる。馬具における轡の出土例からは古墳時代より近代に至るまで乗用馬としての利用があったことを示唆する。近代以降では新たに蹄鉄がみられるようになるが、新たな馬具を伴った乗用馬としての利用がうかがわれる。乗用馬としての用途に関して、中世東国では馬に収斂する傾向が指摘され、武士団の台頭がその背景にあると考えられている(植月2018)。本稿の東北地方を対象とした検討においても中世城館における出土例が多くみられたことから、東国と同様に武士団との関連が想定されよう。

このように、東北地方ではその地理的・社会的背景のもと、各時代で農耕馬や乗用馬、軍用馬としての需要が高かったことによって、牛に対する馬の卓越が生じていたと考えられる。しかし、近代の岩手県域ではウシ遺体出土遺跡数の比率がやや高く、特異的な様相を示した。特に南部地方では明治前期より、新牧畜政策として肉牛としての消費を目的として酪牛政策を推進していた(森1993)。また、当該地域は当時のブランド品であった南部牛の産地としても知られる(中西1994)。このような点が、ウシ遺体比率の高さの背景にある可能性は高いと考えられる。

IV-1-2. ウマ遺体出土遺跡数の地理的差異

ウマ・ウシ遺体出土遺跡数を比較した結果、まず、出土遺跡の数に関しては日本海側に比して太平洋側で多い点を確認された。この点は、馬の生産・利用が日本海側に比して太平洋側において積極的におこなわれていた可能性を示唆する。従来、太平洋側が



館Ⅱ遺跡（16世紀以降）

高木中館遺跡（近世以降）

図8 馬埋葬事例（近世）

伝統的馬産地であった背景として黒ボク土の分布があげられ、古代以降の牧の分布と重なる点が指摘されてきた。また、冬期間の積雪が少ない点の影響も指摘されている（松本2006）。黒ボク土はウマの飼料となる雑穀類の栽培に適した土壤であり、冬期間にも放牧が可能というのはウマ飼育に重要な条件である。これらの地理的要因が、東北地方太平洋側において盛んに馬匹生産がおこなわれた背景にあった可能性は高い。また、近代においても軍馬養成の地として東北地方太平洋側が選択される傾向にあった点が指摘されているが（堀内2019）、これも上記のような地理的背景に起因する可能性は高いと考えられる。

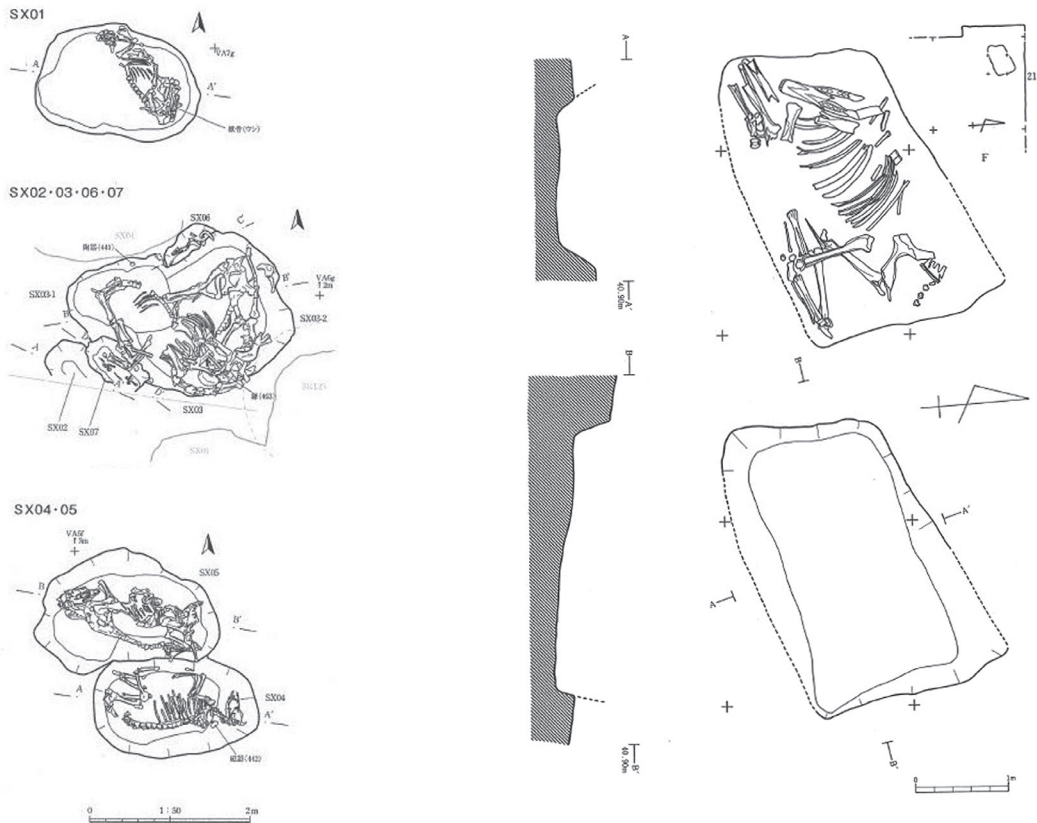
ここで、馬具出土例に目を転じると、太平洋側に比して日本海側では基本的に出土例が少なかった。この点から、ウマ遺体出土量と馬具出土量が東北地方の東西で相関している点を指摘できる。すなわち、馬具出土量の多寡から、日本海側に比して太平洋側で馬利用が盛んであった点を支持できる。ただし、この点については鉄の再生産が馬具出土量に影響している可能性も想定される。

IV-2. 生産・飼育馬のサイズ

ウマ遺体の体高推定結果に関して、特に青森県林ノ前遺跡では体高の分布が限定的であった。図4をもとに、平安時代の林ノ前遺跡と、奈良時代を含む

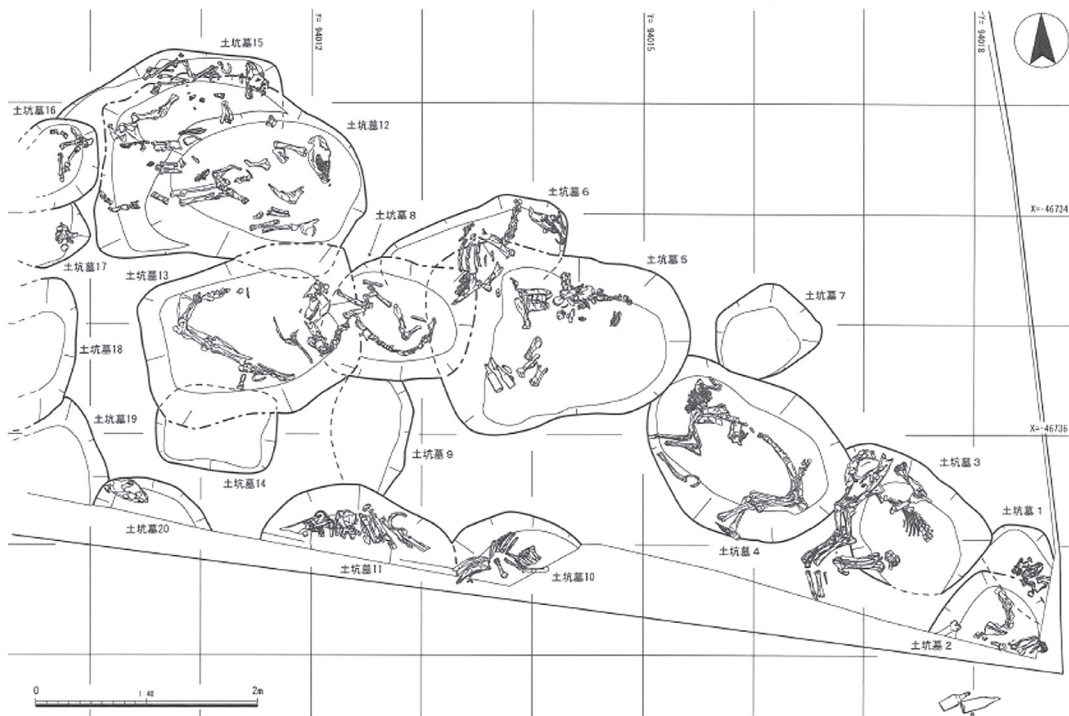
ものの同じく平安時代に属する宮城県山王・市川橋遺跡とを比較すると、林ノ前遺跡では比較的大型の個体に偏る傾向にあるといえる。すなわち、古代の東北地方太平洋側では、南部（宮城県）に比して北部（青森県）においてサイズの大きいウマが生産されていた可能性がある。先行研究で指摘されてきたように、太平洋側にはウマ飼育に重要な雑穀栽培に適した黒ボク土が分布している（松本2006）。したがって、ウマの生産に関する地理的要因において、黒ボク土の分布という点では北部と南部で共通しているため、他の要素について考える必要がある。この点に関して、近年の研究では、石灰岩質土壤での牧草を飼料とする家畜は骨太に形成されるが、北東北太平洋側ではそのような石灰岩鉱床が分布するという点が指摘されている（黒済2021）。このような自然条件の地域的差異が背景にある可能性もあるが、中世における東北北部の根城跡では山王・市川橋遺跡とあまり差異はみられないため、判断が難しい。文化的な要因も含めて、より具体的な検討が必要である。今後の課題としたい。

古代に対して、中世では青森県域の東西を対象に検討した結果、日本海側（大光寺新城跡）が、太平洋側（根城跡）に比して小型個体の比率が比較的高い点が明らかとなった。先述のように、太平洋側にはウマ飼育に重要な雑穀栽培に適した黒ボク土が分布し、北部では石灰岩質土壤が分布する。他の要因



青猿 I 遺跡（近代）

仙台城三ノ丸跡（明治後半以降）



根井沢穴田IV遺跡（大正～昭和初期かそれ以前）

図9 馬埋葬事例（近代）

表4 東北地方における馬具組成

		轡	鐙	鞍	頭絡	蹄鉄	装飾具	地域別 合計	
太平洋側	古墳時代	青森県太平洋側	0	0	0	0	0	0	
		岩手県	0	0	0	0	0	0	
		宮城県	3	2	1	0	0	25	31
		福島県	64	20	21	0	0	176	281
		古墳時代 合計	67	22	22	0	0	201	312
	古代	青森県太平洋側	20	2	0	0	0	1	23
		岩手県	27	5	4	0	0	13	49
		宮城県	21	13	3	0	0	15	52
		福島県	17	2	3	0	0	38	60
		古代 合計	85	22	10	0	0	67	184
	中世	青森県太平洋側	1	0	0	0	0	0	1
		岩手県	1	2	0	0	0	0	3
		宮城県	2	1	0	0	0	0	3
		福島県	0	1	0	0	0	0	1
		中世 合計	4	4	0	0	0	0	8
	近世	青森県太平洋側	0	0	0	0	0	0	0
		岩手県	1	0	0	0	0	0	1
		宮城県	0	0	0	0	0	0	0
		福島県	0	0	0	2	0	0	2
		近世 合計	1	0	0	2	0	0	3
近代	青森県太平洋側	0	0	0	0	0	0	0	
	岩手県	0	0	0	4	10	0	14	
	宮城県	0	0	0	2	0	0	2	
	福島県	1	0	0	5	0	0	6	
	近代 合計	1	0	0	11	10	0	22	
馬具種類別 合計		158	48	32	13	10	268	529	
日本海側	古墳時代	青森県日本海側	0	0	0	0	0	0	
		秋田県	0	0	0	0	0	0	
		山形県	2	2	1	0	0	25	30
		古墳時代 合計	2	2	1	0	0	25	30
	古代	青森県日本海側	1	0	0	0	0	0	1
		秋田県	8	1	0	0	0	1	10
		山形県	0	1	0	0	0	0	1
		古代 合計	9	2	0	0	0	1	12
	中世	青森県日本海側	3	0	0	0	0	0	3
		秋田県	1	0	0	0	0	0	1
		山形県	0	0	0	0	0	0	0
		中世 合計	4	0	0	0	0	0	4
	近世	青森県日本海側	0	0	0	0	0	0	0
		秋田県	0	0	0	0	0	0	0
		山形県	1	0	0	0	0	0	1
		近世 合計	1	0	0	0	0	0	1
	近代	青森県日本海側	0	0	0	0	0	0	0
		秋田県	0	0	0	0	0	0	0
		山形県	0	0	0	0	1	0	1
		近代 合計	0	0	0	0	1	0	1
馬具種類別 合計		16	4	1	0	1	26	48	

が影響した可能性も排除できないが、上記の古代・中世の傾向に関しては、このような地理的要因が影響している可能性が想定される。近世（北目城跡）では以前の時代に比べて体高にばらつきがみられ、小型～大型の多様な個体がみられた。しかしながら未だ1遺跡例のみであるため、ここでの議論は避けたい。本稿では、以前の時代に比べて多様なサイズの個体が含まれているという点を指摘するに留めておく。

IV-3. 生前における馬の利用

IV-3-1. 推定年齢

ウマ遺体の年齢を推定した結果、まず、東北部の古代（林ノ前遺跡）・中世（根城跡）では3.5歳以下の比率が高い傾向が確認された。このような、幼・若齢個体が高い比率で含まれる年齢構成が自然死のみで成立するとは考えにくく、そこには何らかの人為的干渉があったと推定される。人為的干渉の一例として、東国では「延喜式」の規定に則って4歳以上の個体を選別し、一部の個体を都へ献上、残った一部個体を処分するシステムがあったことが、遺跡出土ウマの検討によって指摘されている（植月2018）。東北地方に関しては選別対象となる年齢について現時点では不明であり、「延喜式」と同様に4歳周辺の年齢段階であったかは検討が困難である。しかし、東北地方においても類似のシステムが存在したならば、成獣以上の個体の割合が相対的に低くなり、幼・若齢の段階で選別において在地に残って屠畜された、あるいは病死した個体の比率が高くなったと考えることができる。文献史学の成果より、古代東北太平洋側では10世紀後半より「陸奥国交易馬」という制度が恒例化され、都へと馬を献上していたことが明らかにされている（大石2001、千葉2004）。特に、この制度は武力による征夷の成果であり、東北における奥地の人々と陸奥国の間で、奥六郡・鎮守府を介した交易の一形態である点が指摘されている（大石2001）。やはり献上する個体の年齢は不明であるものの、「延喜式」にみられるような馬の選抜制度、「陸奥国交易馬」が勅旨牧からの貢馬が廃れた後にその伝統を継承したものであるという指摘（高橋1958）をふまえれば、類似した制度のもとで若齢程度の個体を対象とした選別があった可能性は高い。林ノ前遺跡の帰属時期が「陸奥国交易馬」制度がみられる時期と同時期である点や、奥

地との交易を介して都へと献上する役割を担っていたと推定される陸奥国府・山王遺跡において3.5歳以上の個体が主体となる点は、上記の可能性と矛盾するものではない。これらの点から、「陸奥国交易馬」制度のもと、林ノ前遺跡のような奥地で生産された馬が山王遺跡のある陸奥国府に運ばれ、その後、都へと献上された可能性は高いと考えられる。

また、中世の段階では、北東北太平洋側において「四門・九戸の制」という、馬を税として納め、献上する制度が存在していた。これは、当該地域において「牧士」とよばれる役職の人物が給田として牧士田が与えられ、生産された馬の一部個体を貢する代わりにそこで得た利益をそのまま得ることができるという制度であったとされる（入間田1986・2008、岩手県立図書館2019）。本稿におけるウマ遺体の年齢推定の結果、青森地域の東西において、太平洋側の根城跡では3.5歳以下が主体、日本海側の境関館遺跡・大光寺新城跡では3.5歳以上が主体という地域的差異が看取された。特に太平洋側の根城跡に関しては、献上する年齢はやはり不明であるものの、若齢個体を献上していたとすれば、相対的に成獣以上の個体の割合が低くなったとみることも可能である。古代の「延喜式」のように、選抜後に在地に残った個体が一定年齢で屠畜される制度が中世においても存在したことを示す文献記録は管見の限り見当たらないものの、少なくとも根城跡から出土したウマ遺体の傾向をふまえれば、動物考古学の立場からそのようなシステムがあった可能性を提示することができよう。なお、日本海側の境関館遺跡・大光寺新城跡は、当時、津軽平賀郡に属していた。当該地域においても太平洋側と同様に牧士田が設置されていたとされるが、これらの地域における年貢は白布であり、馬を年貢として納める太平洋側とは異なっていたとされる（入間田1986）。これらの点から、年齢推定結果の地域的差異に関しては、上記のような馬の選抜制度の有無が背後にある可能性がある。

近世では北目城跡において3.5歳以上が主体となるという点が確認された。関連する事例として盛岡藩に目を向けると、近世においても古代・中世における馬の選別システムと類似した制度が存在していたとされる。ただし、以前の時期と異なる点として、江戸幕府に献上され、藩主の乗用として重宝された個体も、引退後は南部に戻り種牡馬として余

生を送ったという点が指摘されている（兼平2015・2018）。このような点が、近世における成獣個体の比率の高さの背景にある可能性は高い。以上より、年齢構成から、生前における馬利用に関する1つの形態として、権力者への献上があったといえる。

IV-3-2. 馬具組成

馬具組成の検討より、乗用馬としての用途を示唆する轡以外に着目されるのが、古墳時代において装飾品が主体であった点である。この点は、馬の導入期において、その外見に意識が向けられていたことを示唆する。一般的に、馬は権力との結び付きが想定される家畜である。古墳時代における馬具は主に古墳からの出土例が主体であり、被葬者である当時の権力者との関連性が想定される。この点から、権威性を高めるために馬具による装飾が施された可能性は高く、権力者が有する権威を視覚化させる威信財としての役割があったと考えられる。

IV-4. 死後における馬の扱い

筆者は以前、古代・中世の青森県域を対象に遺跡出土ウマの分析をおこなった際、ウマ遺体は基本的に散乱した状態で出土しており、解体痕（カットマーク）がみられる事例が多い点を把握した。また、部位組成の結果をもふまえながら、死後には皮や肉、骨などの多様な資源利用があったと推定した（櫻庭2023）。本稿において青森県域以外の出土事例も集成し、確認した結果、散乱した状態での出土事例が多く看取された。本稿では解体痕や部位組成の分析を実施していないため、その具体的様相の把握は困難であるが、何らかの死馬利用があった後に廃棄される、というパターンが東北地方において広域的に共通していたと推定される。

ここで、散乱した状態で出土した個体数（散乱個体数）と埋葬個体数の比率を時期別で比較した結果を図10に示す。最小個体数（MNI）で算出し、遺構ごとに計上した。遺構外の資料に関しては遺跡ごとに一括で計上した。なお、遺構が複数の時期に帰属する場合はまたがる時期の数で除し、それぞれ計上した。両者の比率に関して、時期差はみられるものの、基本的に埋葬個体数に対して散乱個体数が卓越する傾向にあった。時期を問わずに、何らかの死馬利用があった後に廃棄されるパターンが多く展開されていた点がうかがわれる。これに対し、埋葬個体

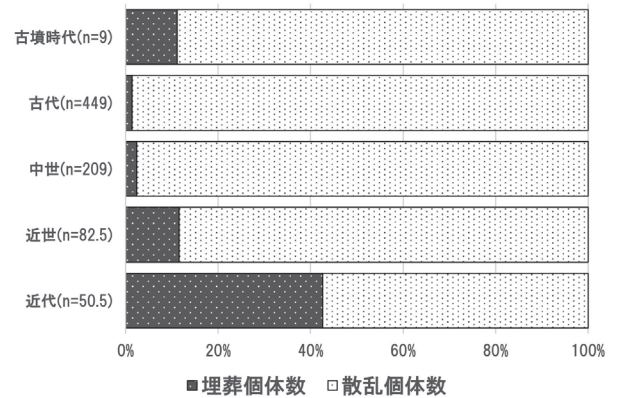


図10 埋葬事例と散乱出土の時期別比率比較 (MNI)

数の比率に目を転じると、最も比率が高いのは近代であり、約45%を占めていた。これに次いで古墳時代および近世の比率が高く、全体の約15%であった。古代および中世では5%以下に留まった。前述のように、ウマ遺体の埋葬事例は、太平洋側を中心とするものの、時期が下るごとに次第に埋葬例が増加する傾向が看取され、特に近世・近代では埋葬事例が比較的多い点が明らかとなった。この点は、図10の個体数での比較においても確認することができる。

近世において埋葬事例が増加する点に関して、盛岡藩では牛皮や鹿皮が武具細工として多用され、馬皮は18世紀以降より軍需・民需の高まりに応じて利用されるようになったとされる（兼平2018）。しかし、死馬の皮剥ぎは農民が自ら剥ぐことを原則していたが、これらは必ずしもおこなわれるわけではなく、そのまま「馬捨て場」に埋められることも多かったという指摘もみられる（青森県史編さん通史部会2018）。これらの点をふまえると、近世の段階では、それ以前の時代に比べて組織的な斃馬処理システムが機能していなかった可能性が高いといえる。

また、兼平賢治（2015）によれば、盛岡藩領には人馬が同じ屋根の下で暮らす南部曲家が生み出され、飼っている馬の安全と健康を祈願する蒼前信仰や駒形信仰の普及もあったとされる。さらに、盛岡藩領には、江戸時代～昭和時代に至るまでの、死馬を供養するための馬頭観音の石碑が多数建てられているという。このように、近世以降において埋葬事例が増加する背景には、組織的死馬利用システムの低調化や、馬に対する信仰の普及などが影響していると考えられる。

ウマ遺体の埋葬事例に関しては植月学が東国の資料を分析しており、そこでは姿勢や頭部の方向、土

坑の規模や出土部位の傾向に時期差がみられる点を明らかにしている（植月2013）。本稿では出土事例の数と、一部資料の提示に留まったが、今後稿を改めて、埋葬事例に関する具体的な検討を試みたい。

おわりに

本稿において、東北地方を対象にウマ・ウシ関連資料としてウマ遺体・ウシ遺体・馬具を集成し、各属性分析の結果に関して考察をおこなった結果、下記の点が明らかとなった。

- ①東北地方では全体的に牛に対する馬の比重が高く、時期的な差異もみられなかった。この点は東国との地域的な差異として捉えられた。ただし、岩手県域近代では比較的ウシ遺体出土例の比率が高く、南部牛生産との関連性が考えられた。
- ②東北地方のなかでも、太平洋側では日本海側に比してウマ遺体・馬具出土量が大きく、積極的な馬匹生産・馬利用が想定された。
- ③遺跡出土ウマの体高を推定し、遺跡比較をおこなった結果、東北地方のなかでも古代太平洋側では北部（青森県林ノ前遺跡）と南部（宮城県山王・市川橋遺跡）で違いがみられ、前者が後者に比して大型個体に偏る傾向がみられた。また、中世青森県域では太平洋側（八戸市根城跡）と日本海側（平川市大光寺新城跡）で地理的差異がみられ、前者が後者に比して比較的大型個体の比率が高かった。このような、遺跡ごとの体高分布の多様性が明らかとなり、その背景の1つとして、黒ボク土や石灰岩質土壌の分布といった地理的環境の影響が想定された。
- ④生前の馬利用に関しては多様な用途が想定され、主には農耕場や乗用馬としての利用がうかがわれた。また、古墳時代では馬具において装飾品の比率が高いという傾向がみられ、威信財としての利用が想定された。加えて、古代・中世・近世における太平洋側では、権力者への献上物としての馬の利用が想定された。
- ⑤死後の馬利用について検討した結果、散乱した状

態や、解体痕を残す骨が多量に出土するパターンと、解剖学的位置を保った状態で全身骨格が出土するパターンの2者が確認された。前者は肉や骨、皮などの何らかの死馬利用がおこなわれる場合、後者は埋葬される場合として想定された。この点から、多様な死馬利用が見出された。また、埋葬事例に関しては時代を下るごとに次第に増加し、特に近世・近代では比較的多く確認され、様々な社会的背景が影響していると考えられた。

本稿での検討を通して、東北地方における馬匹生産・利用史に関する基礎的様相が捉えられ、広域的な共通点や地域的・時期的な特徴が明らかになった。今後、当該地域における遺跡出土ウマを対象とした動物考古学的分析事例を増やしていくとともに、現時点において検討事例の蓄積がみられる東北地方以南の他地域との比較を試み、列島における家畜生産・利用史の具体的な検討につとめたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、匿名の査読者2名からは貴重なご意見・ご指摘を多々賜り、本稿の改善へとつなげることができた。この場を借りて、記してお礼申し上げます。

註

- 1) 本稿では、「ウマ・馬」の表記について、生物学的観点から記述する際には「ウマ」を、歴史学的観点から記述する際には「馬」を用いる。「ウシ・牛」も同様である。
- 2) 古墳時代は河合2018、堀2017、宮代2023、横須賀2006a、古代は白鳥2003・2016、杉山2008、高橋2019・2021、津野2003・2010・2012、福田2008・2012村田2021、中世は白鳥2023・2016、杉山2008、福田2012の各文献を参照した。
- 3) 古墳時代の馬具を集成した際、福島県域を中心として、同一資料において帰属年代が「6世紀後葉～7世紀初頭」、時代が「古墳時代後期」とされているものが一定量みられた。上記の点をふまえ、このような表記がなされている資料については、たとえ7世紀に入っているとしても古墳時代に帰属するものとして扱った。
- 4) 特に、青森県に関しては同一の県域のなかでも太平洋側と日本海側で分け、ここでは特定の市町村名をあげている。本県にはここで示した市町村以外にも存在するが、取りあげているのは表2で示したウマ・ウシ関連資料が確認された市町村である。
- 5) 各遺跡データについて、林ノ前遺跡および大光寺新城跡資料については筆者計測に基づく。他遺跡に関しては、根

- 城跡は植月・他(2021)、市川橋遺跡は宮城県教育委員会(2001a)、山王遺跡は宮城県教育委員会(1996)、北目城跡は仙台市教育委員会(1995)を参照した。
- 6) 年齢推定には顎歯の萌出状況以外にも、永久歯の残存高を推定式に代入する方法がある(西中川・他1991)。しかし、この推定式で用いる歯の計測値が得られている事例が未だ少ない点、集成の結果確認された。そのため、本稿では検討可能な対象資料が比較的多い、顎歯の萌出状況より分析を試みた。なお、日本海側では基本的に出土量および検討可能である事例が少ない。そのなかでも、青森県大光寺新城跡では比較的多量のウマ遺体が出土している(植月2022)。しかし、本遺跡は顎歯の出土量が少なかった。そこで、本遺跡についてはSchmid(1972)を参考に四肢骨の骨端部の癒合状況をもとに生存率を推定し、3.5歳以下個体の比率を算出している(植月2022、櫻庭2023)。この結果をふまえて、日本海側の傾向についても検討することを目的に、算出方法は異なるが大光寺新城跡についても検討対象とした。
- 7) 各遺跡データについて、大光寺新城跡については筆者観察に基づく。林ノ前遺跡は植月・他(2020)、根城跡は植月・他(2021)、境関館遺跡は青森県教育委員会(1987)、山王遺跡は宮城県教育委員会(1996)、北目城跡は仙台市教育委員会(1995)を参照した。

引用・参考文献

- Hoppe, K. A., Stover, S.M., Pascoe, J.R., Amundson, R. 2004. Tooth enamel biomineralization in extant horses : implications for isotopic microsampling. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology*, 206. pp.335-365
- Schmid, E. 1972. *Atlas of Animal Bones. For Prehistorians. Archaeologists and Quaternary*. Elsevier Publishing Company.
- 相澤秀太郎 2021「養老二年八月蝦夷貢馬記事の基礎的考察」『東北歴史博物館研究紀要』22.東北歴史博物館.pp.55-60
- 青森県史編さん通史部会 2018『青森県史通史編2 近世』青森県
- 市川健夫 1981『東書選書69 日本の馬と牛』東京書籍株式会社
- 入間田宣夫 1986「糠部の駿馬」『東北古代史の研究』吉川弘文館.pp.591-631
- 入間田宣夫 1988「久慈・閉伊の驛馬」『中世東国史の研究』東京大学出版会.pp.285-311
- 入間田宣夫 1990「三種宗の貢馬」『北日本中世史の研究』吉川弘文館.pp.167-191
- 入間田宣夫 2005「北日本中世社会史論」吉川弘文館
- 入間田宣夫 2008「中世東北の馬牧群」『牧の考古学』高志書院.pp.59-89
- 岩手県埋蔵文化財センター 1985『岩手の遺跡』岩手県埋蔵文化財センター
- 岩手県立図書館 2019『岩手の馬文化』
- 植月学 2013「甲斐周辺における馬埋葬と頭骨埋納—甲府市朝気遺跡出土のウマ遺体—」『山梨県考古学協会誌』22.山梨県考古学協会.pp.170-182
- 植月学 2018「東国における牛馬の利用」『季刊考古学』144.雄山閣.pp.47-50
- 植月学 2022『津軽中世馬の研究—青森県平川市大光寺新城跡遺跡出土動物遺体調査報告—』帝京大学文化財研究所
- 植月学 2024「平泉の馬—岩手県志羅山遺跡出土馬の再検討—」『帝京大学文化財研究所研究報告』22.帝京大学文化財研究所.pp.155-162
- 植月学・覚張隆史・浅田智晴 2020「青森県における古代の馬利用—林ノ前遺跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究—」『研究紀要』25.青森県埋蔵文化財調査センター .pp.51-65
- 植月学・覚張隆史・櫻庭陸央・船場昌子 2021「中世南部氏の馬利用—根城跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究—」『帝京大学文化財研究所研究報告』20.帝京大学文化財研究所.pp.233-246
- 大石直正 1978「中世の黎明」『UP選書185 中世奥羽の世界』財団法人東京大学出版会.pp.1-40
- 大石直正 2001「奥州藤原氏の貢馬」『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館.pp.76-102
- 兼平賢治 2013「南部馬にみる近世馬の一生」『環境の日本史4 人々の営みと近世の自然』吉川弘文館.pp.134-163
- 兼平賢治 2015『馬と人の江戸時代』吉川弘文館
- 兼平賢治 2018「盛岡藩における死馬利用」『東日本の部落史II 東北・甲信越編』現代書館.pp.137-153
- 河合高也 2018「福島県における馬具副葬古墳の様相と被葬者」『福島考古』60.福島県考古学会.pp.41-60
- 河野通明 2009「農耕と牛馬」『人と動物の日本史2』吉川弘文館.pp.96-126
- 黒濟和彦 2021「4 エミシの馬—狄馬—」『馬と古代社会』八木書店.pp.215-233
- 木田浩 2006「馬の貢上形態に見る陸奥国と古代国家の関わり」『福島県立博物館平成18年度第1回企画展図録 馬と人との年代記～大陸から日本、そして福島へ～』福島県立博物館.pp.105-107
- 小林和彦 1986「史跡根城跡岡前館から出土したウマの遺存骨」『八戸市博物館研究紀要』2.八戸市博物館.pp.32-38
- 佐伯有清 1967『牛と古代人の生活』至文堂
- 櫻庭陸央 2023「青森県域における古代・中世の馬匹生産と馬の利用」『山梨県考古学協会誌』30.山梨県考古学協会.pp.75-94
- 櫻庭陸央 2024「九州地方における牛馬利用の基礎的研究」『九州考古学』99.九州考古学会.pp.23-45
- 佐々木慶一・川尻秋生・黒濟和彦編 2021『馬と古代社会』八木書店
- 白鳥文雄 2003「自然科学的分析一覧」『研究紀要』8.青森県埋蔵文化財調査センター .pp.27-54
- 白鳥文雄 2016「自然科学的分析一覧(その2)」『研究紀要』

- 21.青森県埋蔵文化財調査センター .pp.31-54
- 杉山陽亮 2008「北方の馬産地—隸部地域における馬産の一考察」『牧の考古学』高志書院.pp.199-210
- 高橋透 2019「馬関連の遺構・遺物からみた陸奥国府とその周辺」『古代交通研究会 第20回大会資料集 馬がつなぐ古代社会』古代交通研究会.pp.1-14
- 高橋透 2021「5 馬関連の遺構・遺物からみた陸奥国府」『馬と古代社会』八木書店.pp.241-252
- 高橋富雄 1958「古代東国の貢馬に関する研究—「馬飼」の伝統について—」『歴史』17.東北史学会.pp.14-28
- 高橋富雄 1960「国造制の一問題—その貢馬の意味—」『歴史学研究』8.歴史学研究會.pp.1-10
- 高橋信雄 1996「蝦夷文化の諸相」『古代蝦夷の世界と交流 古代王権と交流 I』名著出版.pp.319-354
- 千葉美和 2004「古代東国の牧と貢馬」『岩手史学研究』87.岩手史学会.pp.23-48
- 津野仁 2003「古代の鍔金具について」『栃木の考古学—埴静夫先生古稀記念論文集』埴静夫先生古稀記念論文集「栃木の考古学」刊行会.pp.288-303
- 津野仁 2010「古代鍔の変遷とその意義」『研究紀要』18.とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター .pp.30-56
- 津野仁 2012「古代轡の変遷とその意義」『考古学雑誌』96-3.日本考古学会.pp.1-41
- 奈良修介・豊島昂 1960「秋田県南秋田郡五城目町岩野山古墳」『秋田考古学』19.秋田考古学会.pp.20-27
- 浪川健治 2018「東北エリアの部落史」『東日本の部落史Ⅱ 東北・甲信越編』現代書館.pp.198-216
- 橋本博幸・鈴木啓 2002「高松古墳群出土金銅製歩揺付雲珠について」『福島考古』43.福島県考古学会.pp.35-50
- 林田重幸・山内忠平 1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部 学術報告』6.鹿児島大学農学部.pp.146-156
- 林田重幸 1978『日本在来馬の系統に関する研究』日本中央競馬界会
- 福島正和 2022「東北地方北部における平安時代の雑穀利用に関する考古学的研究」『紀要』41.（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター .pp.25-44
- 福田友之 2008「青森県出土の古代の馬関連資料」『私の考古学ノート』弘前大学教育学部考古学研究室OB会.pp.43-50
- 福田友之 2012『青森県の貝塚—骨角器と動物資料—』北方新社
- 藤田亮策 1948「眞野古墳群調査概報」『史学』23-3.三田史学会.pp.53-75
- 堀内孝 2019「軍馬改良と名馬の産地—明治期の戦争がもたらした矛盾—」『駿台史学』167.駿台史学会.pp.27-46
- 堀哲郎 2016「日本列島への騎馬文化導入とその展開—東日本を中心に—」『専修大学社会知性開発研究センター 古代東ユーラシア研究センター年報』2.専修大学社会知性開発研究センター .pp.17-45
- 堀哲郎 2017「東北地方における騎馬文化の受容と推移」『第22回 東北・関東前方後円墳研究会 大会 《シンポジウム》馬具副葬古墳の諸問題 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会.pp.25-143
- 堀哲郎 2022「末期古墳出土の轡に関する研究」『専修考古学』16.専修大学考古学会.pp.91-119
- 松野弘 1994「牧畜・乳業の展開—馬」『馬の文化叢書第五巻 近代—馬と日本史4』財団法人馬事文化財団.pp.24-28
- 松本建速 2006『蝦夷の考古学』同成社
- 右島和夫編 2019『馬の考古学』雄山閣
- 宮代栄一 2023「東北地方出土の馬具の研究（上）—宮城県・岩手県出土例を中心に—」『宮城考古学』25.宮城県考古学会.pp.31-52
- 宮代栄一 2025「東北地方出土の馬具の研究（中）—山形県・秋田県・青森県出土例を中心に—」『宮城考古学』27.宮城県考古学会.pp.223-241
- 村田淳 2021「岩手県内出土の古代馬具集成」『紀要』40.（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター .pp.95-104
- 森嘉兵衛 1993「南部の馬」『馬の文化叢書 第四巻 近世—馬と日本史3』財団法人馬事文化財団.pp.56-66
- 森ノブ 1987「南部藩雑書について—特に馬買を中心として—」『東北の歴史と文化』岩手史学会.pp.202-211
- 八木光則 1996「馬具と蝦夷—藤沢沢森古墳群出土の壺鍔を通して—」『岩手史学研究』79.岩手史学会.pp.1-20
- 安田初雄 1959「中世以前の東北の牧馬」『人文地理』11-5.人文地理学会.pp.389-402,409
- 山田隆博・下山貴生 2015「山元町合戦原遺跡発掘調査概要」『平成27年度宮城県遺跡 調査成果発表会 発表要旨』宮城県考古学会.pp.13-18
- 横須賀倫達 2006a「ふくしま古墳時代の馬具・馬形埴輪」『馬と人との年代記—大陸から日本、そして福島へ』福島県立博物館.pp.86-96
- 横須賀倫達 2006b「勿来金冠塚古墳出土遺物の調査Ⅱ—玄室出土馬具・武器類—」『福島県立博物館紀要』20.福島県立博物館.pp.23-46
- 横須賀倫達 2008「羽山1号横穴出土馬具の調査—錫装馬具の確認—」『福島県立博物館研究紀要』22.pp.1-15
- 渡辺一雄 1964「平市下高久・牛転・根岸古墳の調査」『磐城考古』22.磐城考古学会.pp.13-16

報告書

青森県

- 青森県教育委員会 1977『石上神社遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1978『青森市内三内遺跡』
- 青森県教育委員会 1984『浜通遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1986『独狐遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1987『境関館遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1988『李平下安原遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 2000『岩ノ沢平遺跡』

- 青森県教育委員会 2002『隈無(8)遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 2004『中野館跡』
- 青森県教育委員会 2005a『倉越(2)遺跡・大池館遺跡』
- 青森県教育委員会 2005b『三内沢部(3)遺跡・柴山(1)遺跡・洗平(2)遺跡』
- 青森県教育委員会 2005c『通目木遺跡 ふくべ(3)遺跡 ふくべ(4)遺跡』
- 青森県教育委員会 2005d『山元(1)遺跡』
- 青森県教育委員会 2005e『林ノ前遺跡』
- 青森県教育委員会 2006a『湯野遺跡』
- 青森県教育委員会 2006b『林ノ前遺跡Ⅱ』
- 青森県教育委員会 2007『赤平(2)遺跡・赤平(3)遺跡』
- 青森県教育委員会 2009『前川遺跡』
- 青森県教育委員会 2012『八幡遺跡・千石屋敷遺跡』
- 青森県教育委員会 2013『十三盛遺跡』
- 青森市教育委員会 2010『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』
- 青森市教育委員会 2011『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』
- 青森市教育委員会 2014『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』
- 田舎館村 1991『前川遺跡発掘調査報告書』
- おいらせ町教育委員会 2007a『阿光坊古墳群発掘調査報告書』
- おいらせ町教育委員会 2007b『おいらせ町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 櫻井清彦・菊池徹夫 1987『早稲田大学文学部考古学研究室報告 蓬田大館遺跡』六興出版
- 七戸町教育委員会 1995『治部袋館遺跡Ⅱ』
- 七戸町教育委員会 1996『貝ノ口遺跡Ⅱ』
- 下田町教育委員会 1989『阿光坊遺跡発掘調査報告書』
- 下田町教育委員会 1990『阿光坊遺跡発掘調査報告書』
- 下田町教育委員会 1991『阿光坊遺跡発掘調査報告書』
- 下田町教育委員会 1997『中野平遺跡』
- 下田町教育委員会 2006『下田町内遺跡発掘調査報告書9』
- 浪岡町教育委員会 1980『浪岡城跡』
- 浪岡町教育委員会 1982『浪岡城跡Ⅳ』
- 浪岡町教育委員会 1983『浪岡城跡Ⅴ』
- 浪岡町教育委員会 1984『浪岡城跡Ⅶ』
- 浪岡町教育委員会 1986『浪岡城跡』
- 浪岡町教育委員会 1990『大沼遺跡発掘調査報告書』
- 八戸市教育委員会 1980『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 八戸市教育委員会 1982『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 八戸市教育委員会 1985『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅶ』
- 八戸市教育委員会 1986『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅷ』
- 八戸市教育委員会 1987『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅸ』
- 八戸市教育委員会 1988a『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅹ』
- 八戸市教育委員会 1988b『八幡遺跡発掘調査報告書』
- 八戸市教育委員会 1989a『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅺ』
- 八戸市教育委員会 1989b『熊野堂遺跡』
- 八戸市教育委員会 1990『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅻ』
- 八戸市教育委員会 1991『丹後平古墳一八戸新都市区域内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』
- 八戸市教育委員会 1992『八戸市内遺跡発掘調査報告書4』
- 八戸市教育委員会 1993a『八戸市内遺跡発掘調査報告書5』
- 八戸市教育委員会 1993b『殿見遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 八戸市教育委員会 1996『根城一環境整備の発掘調査一』
- 八戸市教育委員会 1997『八戸市内遺跡発掘調査報告書9』
- 八戸市教育委員会 1998『八戸市内遺跡発掘調査報告書10』
- 八戸市教育委員会 2001『酒美平遺跡Ⅱ』
- 八戸市教育委員会 2002a『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ 丹後平古墳群 丹後平(1)遺跡・丹後平古墳』
- 八戸市教育委員会 2002b『新井田古館遺跡』
- 八戸市教育委員会 2003『八戸市内遺跡発掘調査報告書16』
- 八戸市教育委員会 2004a『八戸市内遺跡発掘調査報告書18』
- 八戸市教育委員会 2004b『田向遺跡Ⅰ』
- 八戸市教育委員会 2006『八戸市内遺跡発掘調査報告書22』
- 八戸市教育委員会 2007『八戸市内遺跡発掘調査報告書24』
- 八戸市教育委員会 2008『八戸市内遺跡発掘調査報告書25』
- 八戸市教育委員会 2009『八戸市内遺跡発掘調査報告書26』
- 八戸市教育委員会 2010『八戸市内遺跡発掘調査報告書27』
- 八戸市教育委員会 2011『八戸市内遺跡発掘調査報告書28』
- 八戸市教育委員会 2014『八戸市内遺跡発掘調査報告書31』
- 八戸市教育委員会 2015『史跡根城跡発掘調査報告書ⅫⅤ岡前館第60地点』
- 八戸市教育委員会 2016『熊野堂遺跡第2地点』
- 八戸市教育委員会 2017『八幡遺跡Ⅵ』
- 東通村 1999『東通村史 遺跡発掘調査報告書編』
- 平賀町教育委員会 1990『大光寺新城跡遺跡(第2次)発掘調査報告書』
- 平賀町教育委員会 2000a『大光寺新城跡遺跡発掘調査報告書』
- 平賀町教育委員会 2000b『大光寺新城跡遺跡発掘調査報告書』
- 弘前市教育委員会 2001『早稲田遺跡・福富遺跡発掘調査報告書』
- 弘前市教育委員会 2014『史跡津軽氏城跡 堀越城跡発掘調査報告書15』
- 百石町教育委員会 1995『根岸(2)遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県
- 胆沢城跡研究会 1987『胆沢城-昭和61年度発掘調査概報』
- 胆沢町教育委員会 2002『角塚古墳発掘調査報告書』
- 一戸町教育委員会 1987『上野遺跡・一戸城跡』
- 一戸町文化財愛護協会 1982『一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅱ』岩手県教育委員会 1963『五条丸古墳群』
- 岩手県教育委員会 1979a『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書Ⅰ』
- 岩手県教育委員会 1979b『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 岩手県教育委員会 1980a『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
- 岩手県教育委員会 1980b『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』

- 岩手県教育委員会 1981a 『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書(1)』
- 岩手県教育委員会 1981b 『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1982 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅻ』
- 岩手県教育委員会 1983 『上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1988 『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1989 『夏本遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1992a 『上鬼柳Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1992b 『徳丹城跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1992c 『鼻館跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1995 『柳の御所跡』
- 岩手県教育委員会 1997 『沢田Ⅱ遺跡調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1998 『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 1999 『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2000 『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2001a 『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2001b 『台太郎遺跡第18次発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2002a 『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2002b 『山根館跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2004 『細谷地遺跡第8次発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2005 『西川目・堰向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2006a 『館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2006b 『高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2008 『瀬原Ⅰ遺跡第5次・瀬原Ⅱ遺跡第9次発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2009 『道上遺跡第3次・合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2010 『隠里Ⅷ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2014 『沢田遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2015a 『石田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2015b 『平成26年度発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2016a 『赤前Ⅲ遺跡』
- 岩手県教育委員会 2016b 『千苺遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2016c 『平成27年度発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2018a 『浜川目沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2018b 『根井沢穴田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2018c 『荷竹日向Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2019 『山口駒込Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2020a 『長谷堂貝塚発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2020b 『青猿Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県教育委員会 2020c 『田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県埋蔵文化財センター 1985 『岩手の遺跡』
- 金ヶ崎町教育委員会 1968 『西根古墳と住居址』
- 釜石市教育委員会 2007 『川原遺跡出土鉄製品保存処理報告書』
- 北上市埋蔵文化財センター 1995 『北上遺跡群(1993・1994年度)』
- 北上市埋蔵文化財センター 2015 『八幡遺跡』
- 北上市埋蔵文化財センター 2018 『唐戸崎遺跡』
- 二戸市埋蔵文化財センター 2008 『諏訪前遺跡発掘調査報告書』
- 北上市埋蔵文化財センター 2015 『在府小路遺跡』
- 水沢市教育委員会 2004 『伯濟寺遺跡』
- 宮古市教育委員会 1988 『青猿Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群(堀合館)』
- 宮古市教育委員会 1992 『鯉沢遺跡—平成2年度発掘調査報告書—』
- 陸前高田市教育委員会 1990 『友沼Ⅲ遺跡』
- 秋田県
- 秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所 1999 『弘田柵跡Ⅱ』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1967 『脇本埋没家屋第一次調査概報』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1988 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2001a 『中谷地遺跡』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2001b 『盤若台遺跡』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2006 『縄手下遺跡』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2007 『岩倉館遺跡』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2008 『古川堀反町遺跡』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2011 『小谷地遺跡』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2013 『清水尻Ⅰ遺跡・清水尻Ⅱ遺跡』
- 秋田市遺跡保存会 1990 『秋田城跡 平成元年度秋田城跡発掘調査概報』
- 秋田市遺跡保存会 1991 『秋田城跡 平成二年度秋田城跡調査概報』
- 秋田市遺跡保存会 1992 『秋田城跡 平成三年度秋田城跡発掘調査概報』
- 秋田市遺跡保存会 1993 『秋田城跡 平成四年度秋田城跡発掘調査概報』
- 秋田市教育委員会 1985 『秋田市秋田臨空港都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 秋田市教育委員会 1987 『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 秋田市教育委員会 1992 『秋田城跡』
- 秋田市教育委員会 2002 『藩校明徳館跡』

宮城県

岩沼市教育委員会 2000 『引込横穴墓群』
 角田市教育委員会 1992 『西屋敷1号墳・吉ノ内1号墳発掘調査報告書』
 七ヶ浜町教育委員会 1992 『水浜遺跡』
 七ヶ浜町教育委員会 2016 『七ヶ浜町震災復興関連遺跡発掘調査報告』
 柴田町史編さん委員会 1983 『柴田町史 資料編Ⅰ』
 仙台市教育委員会 1972 『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』
 仙台市教育委員会 1982 『栗遺跡』
 仙台市教育委員会 1983 『今泉遺跡』
 仙台市教育委員会 1984 『戸ノ内遺跡』
 仙台市教育委員会 1985 『仙台市三ノ丸跡発掘調査報告書』
 仙台市教育委員会 1986 『柳生』
 仙台市教育委員会 1994 『中田南遺跡』
 仙台市教育委員会 1995a 『下飯田遺跡発掘調査報告書』
 仙台市教育委員会 1995b 『北日城跡』
 仙台市教育委員会 1997 『養種園遺跡』
 仙台市教育委員会 2000a 『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡Ⅰ』
 仙台市教育委員会 2000b 『王ノ壇遺跡』
 仙台市教育委員会 2004 『元袋遺跡』
 仙台市教育委員会 2005 『洞ノ口遺跡』
 仙台市教育委員会 2011 『若林城跡』
 仙台市教育委員会 2013 『郡山遺跡第167・180・196次調査』
 大和町教育委員会 1972 『宮城県黒川郡大和町烏屋遺跡調査報告』
 多賀城埋蔵文化財センター 1989 『新田遺跡』
 多賀城市教育委員会 1984 『市川橋遺跡調査報告書』
 多賀城市教育委員会 2001 『市川橋遺跡』
 多賀城市教育委員会 2003 『市川橋遺跡』
 多賀城市教育委員会 2004 『市川橋遺跡』
 多賀城市教育委員会 2020 『多賀城市内の遺跡2』
 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 『東北大学埋蔵文化財調査年報3』
 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報7』
 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報11』
 東北大学埋蔵文化財調査委員会 2008 『東北大学埋蔵文化財調査年報19』
 東北大学埋蔵文化財調査委員会 2011 『東北大学埋蔵文化財調査報告1』
 東北大学埋蔵文化財調査委員会 2013 『東北大学埋蔵文化財調査報告2』
 東北大学埋蔵文化財調査委員会 2020 『東北大学埋蔵文化財調査報告8』
 東松島市教育委員会 2008 『矢本横穴墓群Ⅰ』
 東松島市教育委員会 2010 『矢本横穴墓群Ⅱ』

東松島市教育委員会 2015 『矢本横穴墓群第12・13次調査』
 松山町史編纂委員会 1987 『松山町史』
 宮城県教育委員会 1979 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
 宮城県教育委員会 1980a 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』
 宮城県教育委員会 1980b 『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』
 宮城県教育委員会 1985 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』
 宮城県教育委員会 1986 『新浜遺跡』
 宮城県教育委員会 1988 『西前・町田遺跡』
 宮城県教育委員会 1990a 『利府町郷楽遺跡Ⅱ』
 宮城県教育委員会 1990b 『山王遺跡』
 宮城県教育委員会 1990c 『大年寺山横穴群』
 宮城県教育委員会 1991 『山王遺跡』
 宮城県教育委員会 1992 『山王遺跡』
 宮城県教育委員会 1993 『山王遺跡』
 宮城県教育委員会 1994a 『下草古城跡ほか』
 宮城県教育委員会 1994b 『山王遺跡Ⅰ』
 宮城県教育委員会 1994c 『山王遺跡八幡地区の調査』
 宮城県教育委員会 1994d 『藤田新田遺跡』
 宮城県教育委員会 1996 『山王遺跡Ⅲ』
 宮城県教育委員会 1997 『山王遺跡Ⅴ第2分冊石伏地区』
 宮城県教育委員会 2001a 『市川橋遺跡の調査』
 宮城県教育委員会 2001b 『一本柳遺跡Ⅱ』
 宮城県教育委員会 2003 『新田東遺跡』
 宮城県教育委員会 2006 『中野高柳遺跡Ⅳ』
 宮城県教育委員会 2007 『早風遺跡ほか』
 宮城県教育委員会 2009 『市川橋遺跡の調査第2分冊』
 宮城県教育委員会 2010 『壇の越遺跡・早風遺跡ほか』
 宮城県教育委員会 2014 『山王遺跡Ⅵ—多賀前地区第4次発掘調査報告書—』
 宮城県教育委員会 2016 『熊の作遺跡ほか』
 宮城県教育委員会 2018a 『山王遺跡Ⅶ』
 宮城県教育委員会 2018b 『団子山西遺跡Ⅰ』
 宮城県多賀城跡調査研究所 1974 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1973』
 宮城県多賀城跡調査研究所 1975 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1974』
 宮城県多賀城跡調査研究所 1977 『伊治城跡Ⅰ』
 宮城県多賀城跡調査研究所 1996 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1995』
 宮城県多賀城跡調査研究所 2010 『宮城県多賀城跡調査研究所年報2009』
 利府町教育委員会 1978 『川袋古墳群』
 亘理町教育委員会 1981 『桜小路横穴墓群』

山形県

山形県教育委員会 1979 『大之越古墳発掘調査報告書』
 山形県教育委員会 1985 『お花山古墳群発掘調査報告書』

- 山形県教育委員会 2002 『鶴ヶ城跡発掘調査報告書』
 山形県教育委員会 2009 『亀ヶ崎城跡発掘調査報告書』
 山形県教育委員会 2010 『天王遺跡第1・2次発掘調査報告書』
 山形県教育委員会 2012 『木の下館跡第1～4次発掘調査報告書』
 山形県教育委員会 2013 『山形城三の丸跡第10次発掘調査報告書』
 山形県教育委員会 2014 『山形城三の丸跡第12次発掘調査報告書』
 山形県教育委員会 2015 『道出遺跡第1・2次発掘調査報告書』
 山形市教育委員会 2004 『双葉町（山形城三の丸跡）発掘調査報告書近世編』
 山形県教育委員会 2012 『嶋遺跡 範囲確認調査報告書<総括編>』
- 福島県**
 会津坂下町教育委員会 1992 『経塚古墳』
 石川町 2006 『石川町史』
 泉崎村教育委員会 1982 『原山1号墳概報』
 いわき市教育文化事業団 1986 『龍門寺遺跡』
 いわき市教育文化事業団 1990 『岸遺跡』
 いわき市教育文化事業団 1991 『戸田条里遺跡』
 いわき市教育文化事業団 1993 『千代鶴横穴群』
 いわき市教育文化事業団 1997a 『泉町C遺跡』
 いわき市教育文化事業団 1997b 『中山館跡Ⅱ区』
 いわき市教育文化事業団 2000 『根岸遺跡』
 いわき市教育文化事業団 2001a 『荒田日条里遺跡』
 いわき市教育文化事業団 2001b 『横山B遺跡』
 いわき市教育文化事業団 2002a 『荒田日条里制遺構・砂畑遺跡』
 いわき市教育文化事業団 2002b 『植田郷B遺跡』
 いわき市教育文化事業団 2002c 『栗木作遺跡 弥生時代中期遺跡の調査』
 いわき市教育文化事業団 2007 『後田遺跡・後田古墳群』
 いわき市教育文化事業団 2010 『神谷作106号墳・白穴横穴群』
 いわき市教育文化事業団 2011 『八幡横穴群』
 いわき市教育文化事業団 2012 『餓鬼堂横穴群2』
 いわき市教育文化事業団 2017 『神谷作古墳群』
 いわき市教育文化事業団 2018 『久保ノ作古墳群 館山横穴群』
 いわき市教育文化事業団 2020 『餓鬼堂横穴群3』
 いわき市教育文化事業団 2022 『餓鬼堂横穴群4』
 大熊町 1984 『大熊町史2』
 鏡石町 1982 『鏡石町史2』
 北塩原村教育委員会 2014 『福島県耶麻郡北塩原村 下高山遺跡』
- 郡山市教育委員会社会教育課 1979 『阿弥陀壇』
 白河市 2001 『白河市史4』
 白河市教育委員会 1973 『白河観音山横穴群発掘調査概報』
 白河市教育委員会 1981 『郭内横穴墓群』
 白河市教育委員会 1997 『建鉾山Ⅱ』
 長沼町教育委員会 1970 『才合地山古墳調査報告書』
 楡葉町教育委員会 1989 『名古谷横穴群調査報告』
 原町市教育委員会 2000 『原町市内遺跡発掘調査報告書』
 広野町教育委員会 2002 『堂ノ原遺跡』
 福島県 1964 『福島県史6』
 福島県いわき市 1971 『いわき市史別巻 中田装飾横穴』
 福島県いわき市 1986 『いわき市史1』
 福島県教育委員会 1963 『福島県東部地区遺跡発掘調査報告書』
 福島県教育委員会 1979 『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』
 福島県教育委員会 1983 『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』
 福島県教育委員会 1990 『相馬開関関連遺跡調査報告Ⅱ』
 福島県教育委員会 1993 『東北横断自動車道遺跡調査報告23』
 福島県教育委員会 1996 『母畑地区遺跡発掘調査報告39』
 福島県教育委員会 1999 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告3』
 福島県教育委員会 2002 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告15』
 福島県教育委員会 2009 『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告2』
 福島県教育委員会 2011 『阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告1』
 福島県教育委員会 2018 『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告6』
 福島県教育委員会 2022 『県道広野小高線関連遺跡発掘調査報告34』
 福島県西白河郡矢吹町刊行会 1983 『福島県西白河郡矢吹町七軒横穴群』
 福島県原町市教育委員会 2000 『原町市内遺跡発掘調査報告書5』
 福島市教育委員会 1969 『福島市史6』
 福島市教育委員会 1988 『中ノ内遺跡』
 福島市教育委員会 1989 『月ノ輪山1号墳一月ノ輪山1号墳発掘調査報告一』
 福島市教育委員会 1991 『平成2年度 県営畑地帯総合土地改良事業荒井地区関連遺跡調査報告 宮脇遺跡』
 福島市教育委員会 1992 『岩崎町遺跡』
 福島市教育委員会 1997 『上ノ平遺跡・上ノ平古墳群』
 福島市教育委員会 2009 『富塚前遺跡2』
 南相馬市教育委員会 2019 『西迫横穴墓群（3次調査）』
 本宮町教育委員会 1984 『天王壇古墳』

The basic research on the history of horse breeding and utilization in the Tohoku region

Rikuo Sakuraba*

* Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

Abstract

In this paper, based on data collected horse and cattle related materials (horse remains, cattle remains, and harnesses) belonging to the Kofun period to the modern period in the Tohoku region, I conducted the basic research of horse production and utilization in the Tohoku region.

Calculation of the ratios of horse and cattle remains, the ratio of horse remains was generally high in the Tohoku region. However, there were more horse remains and harnesses excavated on the Pacific side of the Tohoku region than on the Sea of Japan side, indicating relatively active horse production and utilization. The comparison of body height estimation revealed that regional differences, suggesting the influence of geographic environment. The use of horses during life was assumed to be diverse, including use as prestige materials, offerings, agricultural, and riding. Regarding the posthumous use of horses, it was observed that some horses were used after death, while others were buried. The latter type has been gradually increasing, and especially in the early modern and modern periods. This was thought to be due to the lack of a functioning system for the disposal of dead horses and the spread of beliefs about horses.

Keywords : Kofun Period – modern, Tohoku region, horse remain, cattle remain, harness

